

令和6年度

入賞作品集

「少年の主張」
中学生話し方大会



広島県の青少年のマスコット
「ゆっぴー」



「家庭の日」に
関する
作文・図画

公益社団法人青少年育成広島県民会議

青少年育成の基本指針

(昭和52年6月1日青少年育成広島県民会議制定)

前 文

「青少年は日本の希望である」という言葉は、われわれの心を支えている標語である。ところが、青少年の非行が問題になると、明確な実施効果の見定めもつかぬままに、条例や法律の制定に期待の高まるのが実状である。しかし、青少年の非行が大人の生活の反映であるとすれば、青少年の健全育成は、大人の反省なしには実現しないであろう。大人がかつて青少年であったように、青少年はやがて大人になるのである。人間の生涯は、多様な価値観の個性的選択による自己教育の連続であるといえよう。

ここに制定された青少年育成の基本指針は、ただ青少年育成のあり方を抽象的に示したものに過ぎない。それは、各地域の実状に応じて具体化されることが期待される。総括的にいえば、資源の乏しさを克服して、相当高い生活水準に到達している現代日本において、青少年は将来どのような展望をもって進んだらよいか、これが最大の課題である。

われわれは、青少年の前途に幸福の「青い鳥」の夢を託したい。

青少年育成の基本指針

(個人)

一 個性の独自性に対する自覚にもとづき、その価値可能性を錬磨し、生涯教育の基礎をつくる。

(社会)

一 家庭の愛情にはぐくまれ、社会生活において、友情と連帯の意識を養う。

(自然)

一 国土の自然を愛護するとともに、地域社会の文化を尊重し、環境の教育的整備につとめる。

(世界)

一 諸民族の生活と文化を理解し、平和と親善の心をこめて、国際交流に寄与する。

(総括)

一 日々の生活のなかに、生きがいを求めてわが道を行き、一隅を照らす光となる。

はじめに

「少年の主張」・中学生話し方広島大会2024（第46回「少年の主張」広島県大会、第58回中学生話し方大会）を広島県中学校話し方連盟、独立行政法人国立青少年教育振興機構と共催で、令和6年9月7日（土）に開催しました。

今大会には、県内中学校の42校から3,313編の応募があり、その中から原稿審査を通過した16名が、会場において、それぞれの主張を力強く発表していただきました。

発表内容としては、3人の1年生の発表がありフレッシュな感覚を覚えるとともに、学校、地域、個人的な体験を含め自分の周りの特徴をうまくまとめていました。その思いを通して視野を開いていく素晴らしい発表でした。

この作品集は、発表者全員の発表内容を記録しております。

「家庭の日」に関する作文・図画は、県内の小・中学生を対象に募集を行い、県内の小学校33校、中学校32校から作文・図画を合わせて1,180作品の応募がありました。

これらの作品は、日常生活において家族と自分とのかかわり方で感動したこと、家族に感謝している心や存在の大切さなど、自分の気持ちを素直に純粋に表現しています。

応募作品の中から事前審査を通過した作文30作品、図画127作品を厳正に審査し、特選作文3作品、特選図画1作品、入選作文17作品、入選図画5作品を掲載しております。

この作品集を多くの皆様にご覧いただき、小・中学生の思いを受けとめていただければ幸いです。

終わりに、この事業の実施に当たりご協賛いただいた国際ソロプチミスト広島、広島清流ライオンズクラブ、公益財団法人広島青少年文化センター及び県内13ロータリークラブ並びにご協力いただいた関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年12月

公益社団法人青少年育成広島県民会議
会長 神出 亨

「少年の主張」に関する目次

○第46回「少年の主張」広島県大会・第58回中学生話し方大会会場風景 ……………	1
○第46回「少年の主張」広島県大会・第58回中学生話し方大会発表者一覧 ……………	2
○受賞者一覧	
広島県知事賞	
1ピースから広がる未来	呉市立仁方中学校 3年 おおだん 大段 りあ … 4
公益社団法人青少年育成広島県民会議会長賞	
すてきな友達との出会い方	広島市立江波中学校 3年 そねだももこ 曾根田桃子 … 5
広島県中学校話し方連盟会長賞	
偏見にとらわれない	東広島市立八本松中学校 3年 なかおかれおな 中岡玲央菜 … 6
国際ソロプチミスト広島会長賞	
じいじの決断～不便をこえて～	広島市立瀬野川中学校 3年 たにむら もみじ 谷村 紅葉 … 7
広島清流ライオンズクラブ会長賞	
夢に近づく為のアートマイル	尾道市立瀬戸田中学校 2年 かん たいち 菅 太一 … 8
優 秀 賞	
五感で感じることの大切さ	広島県立広島中学校 2年 こうの はるき 河野 春希 … 9
笑顔と愛情で郷土を繋ぐ西中貢献隊	庄原市立西城中学校 3年 くりす ひな 栗栖 陽愛 … 10
広がれ！竹原の魅力	竹原市立賀茂川中学校 3年 うえの ゆめか 上野 夢華 … 11
変わってやる	尾道市立重井中学校 3年 つきしま みなみ 築島実奈美 … 12
	(発表順)
優 良 賞	
つなぐ想い	広島市立三入中学校 1年 ふじい みつき 藤井 美月 … 13
口和の伝統を継ぐ	庄原市立口和中学校 2年 ながさと りん 長里 凜 … 14
一人ではできないこと	坂町立坂中学校 2年 きむら ゆな 木村 結菜 … 15
十三才の初挑戦	尾道市立高西中学校 1年 あわむら さな 栗村 紗菜 … 16
「結果良ければすべてよし」という考え方	三次市立吉舎中学校 1年 いのうえ あいり 井上 愛梨 … 17
夢は無くて	三次市立八次中学校 3年 にしかわ せりな 西川 惺莉奈 … 18
	(発表順)
基準特別賞	
響と奏と碧	広島市立可部中学校 3年 しほむら あおい 柴村 碧 … 19
○講 評	
審査員長 和田 晋 比治山大学非常勤講師 ……………	20
○第46回「少年の主張」広島県大会・第58回中学生話し方大会開催要領 ……………	22
○審査員及び審査基準 ……………	24
○第46回「少年の主張」全国大会～わたしの主張2024～内閣総理大臣賞 受賞作品	
一隅を照らす	宮城県 栗原市立栗原南中学校 3年 ケイバージーバ … 25

「家庭の日」に関する目次

特選（広島県知事賞）

●作文の部

ぼくのひいおばあちゃん	竹原市立竹原西小学校	6年	小谷 奏太	… 26
「ありがとう」に心を込めて	広島市立城山北中学校	2年	中小城 咲衣	… 27
大切な家族がいること	三次市立吉舎中学校	2年	藤川 晟太	… 28

●図画の部

かぞくみんなでごはんを食べているところ。	尾道市立久保小学校	2年	宮本 泰志	… 46
----------------------	-----------	----	-------	------

入選（公益社団法人青少年育成広島県民会議会長賞）

●作文の部

おうちにきてくれてありがとう	東広島市立西条小学校	1年	山口 瑚遥	… 29
ぼくのおとうさんは、あそびのたつ人	三原市立糸崎小学校	2年	岡野 真拓	… 30
ぼくのいもうと	東広島市立小谷小学校	2年	福廣 遥翔	… 31
私の家族	広島県立三次中学校	1年	久保井 逢花	… 32
家族の戦い	広島市立可部中学校	1年	佐々木 優	… 33
家族で乗り越える	東広島市立磯松中学校	1年	佐藤 恵衣	… 34
夕食の時間	北広島町立豊平学園	7年	原田 唯	… 35
前向き思考は伝染する	廿日市市立七尾中学校	2年	神垣 智	… 36
また一つ成長した妹へ	三次市立吉舎中学校	2年	峠埜 来音	… 37
家族の健康改善	三原市立久井中学校	2年	野々部 雄大	… 38
祖父の病気から学んだこと	東広島市立磯松中学校	2年	濱井 優那	… 39
お父さんと僕	海田町立海田中学校	2年	横平 拓海	… 40
父を胸に感じながら	呉市立阿賀中学校	3年	高崎 夕未	… 41
過去の僕と今の僕	三原市立大和中学校	3年	東 朝日	… 42
いつもありがとう	三原市立久井中学校	3年	宗岡 美來	… 43
私の自慢の兄	東広島市立磯松中学校	3年	山井 菜央	… 44
私が家族にできること	廿日市市立四季が丘中学校	3年	脇谷 晏治	… 45

●図画の部

ママとこいをみにいったのしかったよ	大崎上島町立東野小学校	1年	望月 章宏	… 47
妹のたんじょうびです。弟とよくけんかします。	広島市立長束小学校	2年	伊藤 慎	… 47
家族みんなでそうめんがしをしました。	東広島市立寺西小学校	3年	上野 暉典	… 47
家族でキャンプに行ったのが楽しかった。	東広島市立寺西小学校	3年	朽木 莉希	… 47
お父さんと初めての山陰でイカの夜釣り	福山市立津之郷小学校	5年	栗田 永遠	… 47

令和6年度「家庭の日」作文・図画募集要綱	… 48
----------------------	------

審査員及び審査要領	… 49
-----------	------

令和6年度応募校一覧	… 50
------------	------

「少年の主張」・中学生話し方大会 2024

日時：令和6年9月7日（土）10：00～14：30

場所：広島県社会福祉会館（広島市南区比治山本町12-2）



集合写真



大会開始前の会場



審査委員・会場風景



主催者及び来賓登壇



表彰式の風景

発表者一覧



基準
「響と奏と碧」

広島市立可部中学校
3年 柴村 碧



1番
「つなぐ想い」

広島市立三入中学校
1年 藤井 美月



2番
「口和の伝統を継ぐ」

庄原市立口和中学校
2年 長里 凜



3番
「一人では
できないこと」

坂町立坂中学校
2年 木村 結菜



4番
「十三才の初挑戦」

尾道市立高西中学校
1年 栗村 紗菜



5番
「五感で感じることの
大切さ」

広島県立広島中学校
2年 河野 春希



6番
「すてきな友達との
出会い方」

広島市立江波中学校
3年 曾根田桃子



7番
「『結果良ければすべて
良し』という考え方」

三次市立吉舎中学校
1年 井上 愛梨



8番
「笑顔と愛情で郷土を
繋ぐ西中貢献隊」

庄原市立西城中学校
3年 栗栖 陽愛



9番
「夢に近づく為の
アートマイル」

尾道市立瀬戸田中学校
2年 菅 太一



10番
「1ピースから
広がる未来」

呉市立仁方中学校
3年 大段 りあ



11番
「夢は無くても」

三次市立八次中学校
3年 西川惺莉奈



12番
「偏見に
とらわれない」

東広島市立八本松中学校
3年 中岡玲央菜



13番
「じいじの決断
～不便をこえて～」

広島市立瀬野川中学校
3年 谷村 紅葉



14番
「広がれ！
竹原の魅力」

竹原市立賀茂川中学校
3年 上野 夢華



15番
「変わってやる」

尾道市立重井中学校
3年 築島実奈美



1ピースから広がる未来

呉市立仁方中学校

3年 大 段 り あ

なんでそんなひどいことをするん？

そこには病気で、ケガで苦しむ子どもがおるんよ。これ以上ひどいこと、止めて!!

病院までが爆撃されてしまっている。毎日報道されるニュース。こんな悲惨な町に人が生活しているんだ。死んでいく人の数は増え続けて、どんどん町が壊されていく。

ウクライナの現状が、紛争というものの酷さが全世界に伝えられている。

ちょうどそのころ、帰省していた医大生の従姉に会い、なぜ医者になろうとしたのかという話を聞きました。

「私はね、紛争で困ってる子どもを救いたいんよ。そのために医者になりたいんよ。」

中学生の時、たまたま見たドキュメンタリー番組で、罪のない子どもたちが苦しんでいる姿を見たのだそうです。この子たちを救いたい! 度々ニュースで流れる紛争。そのニュースを見るたび、医者になりたいという思いは強くなったのだそうです。

その話を聞いて、中学生の時の思いが、ずっと薄れず目標に向かっていく姿に、私は感銘を受けました。そして、人生をかけて、人の命を救いたいという思いに、憧れを抱きました。

私も人のために行動したい。

その思いを実現させてくれたのは、学校で配られたボランティア募集のプリントでした。

たくさんの活動内容の中から、私が選んだのは「ネパールの子供たちに絵本を贈る」というものでした。

まず、青年海外協力隊の方にネパールという国について聞きました。ネパールでは、1996年から11年も紛争が続いたそうです。

でも、紛争が終わって18年経った今でも貧しい暮らしが続いている人が約20%もいるそうです。水は水道からは出でこず、何キロも歩いて汲みにいくのだそうです。水を汲むための道具とそこに入った水を想像すると、子どもの肩にどんな重さがかかってくるのか想像できます。

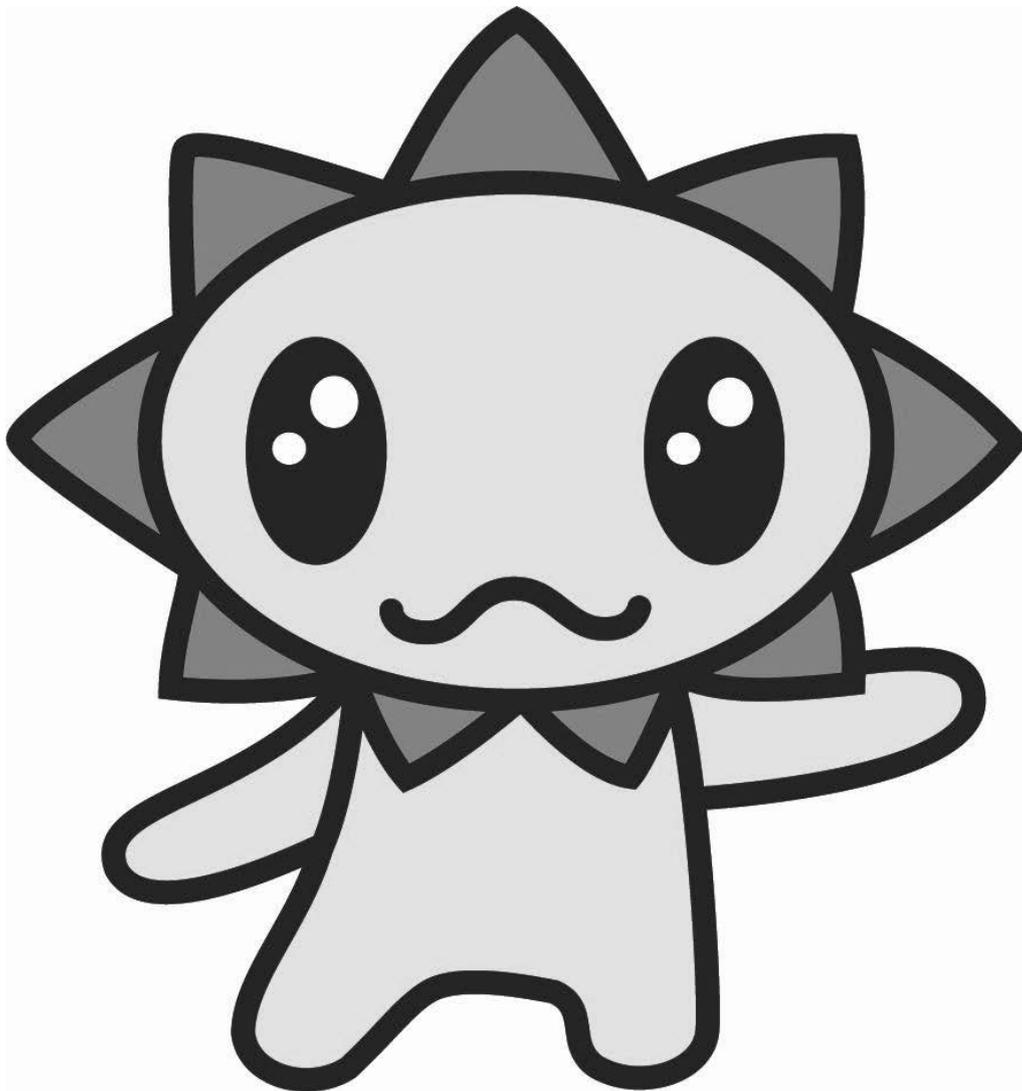
私たちの生活では、水が欲しければ、蛇口をひねることで簡単に好きなだけ出てきます。子どもが水を汲みに行くなんて、何年昔のことでしょう。だから、ネパールでは絵本も高価なもので、なかなか買えないのだそうです。紛争が終われば人々は幸せになる、そういった考えがいかに浅はかなものか思い知らされました。

ウクライナの紛争が終わったとしても、復興は難しく、長い時間がかかるのだらうなあ癒えることのない身体の傷や心の傷を負ったまま、一歩踏み出すことさえ難しいんだらうなあ。紛争という言葉の裏に隠された重く、暗い現実が私の心にずっしりとのしかかってきました。

話を聞いた後、日本の絵本が配られ、ネパール語に翻訳されたシールを貼っていきました。作業はとても簡単なものでしたが、この本が子どもたちのもとに届き、笑顔で読んでくれたらいいなあ、ほんのひとときでも、安心して楽しい時間を過ごしてくれたらいいなあ、そんな想像が私の心に広がりました。

ウクライナの侵攻から2年、人々の心から関心が薄れていく中、現実から目を背けず、自分ができる小さなことを探していきたいです。

「世界を変えるための一歩は私たちにもできる。そしてその一歩が誰かの幸せの1ピースになるといいな。」と思っています。



※本人の希望により掲載を控えさせていただきます。

広島県中学校話し方連盟会長賞



偏見にとらわれない

東広島市立八本松中学校

3年 中 岡 玲央菜

「外国人は嫌いだ。」

この言葉を私は身近な人から聞いたことがあります。理由はわかりませんが、きっと、何か偏見を持っているからではないかと思います。実は私も、「外国人は怖い」というイメージがありました。しかし、そのイメージが変わる出来事がありました。

それは、小学校5年生の新学期のことです。クラスに中国から転校生が来たのです。彼女は日本語が全く分かりませんでした。ですから、先生方もコミュニケーションがとれず、とても苦労していました。また、その頃、中国では新型コロナウイルスの感染者が増え、日本では毎日ニュースでそのことが報道されていました。私は、家に帰って父に、

「中国から転校生が来た。」

と話す、「コロナウイルスを持って来ているのではないか」「うつされるのではないか」と話したことを覚えています。今考えると、申し訳ないのですが、そのように思っていたのはクラスメイトも同じでした。ですから、皆、自然と彼女のことを避けていました。私自身も、彼女と自ら関わることはありませんでした。

そんなある日、休憩時間に友達と話をしていると、彼女に「一緒に折り紙しよう。」

と誘われたのです。当時の私は、「友達と話しているのに、どうして?」と思い、正直嫌でした。でも、今考えてみると、クラスメイトに避けられている中、誘うことは勇気が必要だったと思います。私はそんな気持ちも分からず、渋々一緒に折り紙をし始め、驚いてしまいました。彼女は、日本人である私より折り方を知っていたのです。まだ簡単な日本語しかわからないのに、私が知らない折り方を、自分が知っている日本語で一息懸命教えてくれました。私は、今まで、国が違うことや中国への偏見だけで彼女のことを避けていたことが情けなくなりました。慣れない環境、言葉も通じない状況の中で、彼女はどんなにか大変だったでしょう。しかも、周りの人から避けられて、とても傷ついたことでしょう。

私はこのことをきっかけに、彼女と仲良くなり、一緒に遊ぶようになりました。相変わらず言葉の壁はあり、気を付けて話しても通じないことも沢山ありました。ですから、私は、翻訳機を使った方がよいのではないかと思うこともありました。しかし、彼女は本当にわからない時しか使いませんでした。理由を聞くと、「出来るだけ自分の力でコミュニケーションをとるために、早く日本語を覚えたいから。」と言っていました。私は素直に「すごい!」と思いました。もし私が外国で生活するようになって、そこまでの努力はできないと思います。けれども、依然として一部のクラスメイトは彼女を避けていました。

しかし、ある時、その状況が変わる出来事がありました。私がいつも通り彼女と工夫しながらコミュニケーションをとっていると、先生が誉めてくださったのです。すると、クラスメイトも褒めてくれ、彼女が日本語を頑張っている努力も認めてくれたのです。彼女の努力は、私の心だけでなく、皆の心を動かしたのです。

そして今、私は変わらず彼女と仲良く過ごしています。彼女の日本語はとても上手くなっていて、普通に会話もできます。

私がこの出会いを通して心から思うことは、国や言葉の違いは関係ないということ、周囲の偏見に惑わされず、まずは自ら話をしてみるのが大切だということです。そして、これは彼女が言っていたのですが、言葉が分からなくても、周囲が自分のことを受け入れてくれているかどうかは感じ取れます。私たちは、まずは外国から来た方が日本で辛い思いをしないよう、日本が外国人にとって住みやすい国と思ってもらえるようにしないといけないと思います。そして、そのことが、私たち日本人の視野も広げ、新たな繋がりができることにもなるでしょう。私は、これからも周囲の偏見にとらわれず、自らコミュニケーションをとっていきたいです。

国際ソロプチミスト広島会長賞



じいじの決断～不便をこえて～

広島市立瀬野川中学校

3年 谷村 紅葉

「もみ、ごめんの、わしもうちょっとで免許返納するけん車で送迎できんようになるわ。」

半年前のこと、祖父である「じいじ」の突然の告白に私は驚き、戸惑いました。

私はじいじが大好きです。私はしょっちゅうじいじの家に立ち寄ってじいじと話したりお手伝いをして一緒に過ごしています。車でもよく出かけました。中でも印象深い思い出は、6年前の「西日本豪雨」の時のことです。JRや国道など、周辺のインフラは浸水、損壊。大きな被害を受けました。習い事に行くにも普段通らないような細い山道を迂回して通るので20分くらいで着く場所も1時間以上かかります。それでもじいじは、何度も習い事先へ送迎してくれました。大変でした。時間もかかりました。でもじいじと一緒にいる車の中は今でも鮮明に残る思い出です。免許を返納したら…。「それ」はできません。なぜじいじは免許返納をしたのでしょうか。

安全のためです。免許がなければ車での事故はありません。歩行中でも事故は起こります。ただ車を運転しているの事故は加害者になることが多いです。車の安全な運転には認知能力、視力、反応の速さが必要とされます。だから高齢ドライバーには運転は危険なのです。じいじは77歳の高齢ドライバー。だけどしっかり歩いています、目も悪くありません。免許返納しなくても勝手に思っていました。

しかし数年前、じいじは癌を患いました。闘病生活でずいぶん体力が落ちて、視力や瞬時の判断力など不安に思うことも増えてきたらしいです。そういえば私と同乗している時、歩行者確認が遅くて急ブレーキを踏んだり、ということはありません。事故を起こす前に、じいじは免許を返納したのです。「もみや家族を乗せて事故を起こすことは絶対にダメだ。」「人とぶつかりでもして、わしが加害者になりそのことでもみや家族を悲しませたくない。」そんなじいじの強い思いがあったのでしょうか。

正直、じいじの車がないと私は不便です。私がそう感じるくらいなので、じいじ自身はなおさら不便を感じるはず。また車を通しての、いろいろな人との思い出はもう作れません。送迎などで私の役に立っているという喜びももうもてません。それでもじいじが免許返納して「よかった」という思いが私には強い。車に乗らないことで、事故を起こすリスクがなくなりました。とても安心です。

さらにその後のじいじを見ていると「よかった」という思いはいつそう強くなりました。返納してからのじいじは、はつらつとしています。歩くことが多くなり、体の調子がよさそうです。電動自転車を購入し、近所の人ともよく話ができるみたいで楽しそうです。病院に行くのは大変になったけれど、叔父に車で送迎をしてもらい、会話を楽しんでいます。じいじは不便を嘆いたり、悔やんだりするのではなく、不便だからこそ発見できた「不便益」を楽しんでいます。少なくとも私にはそう見えます。

高齢者の事故がよくニュースになっています。高齢ドライバーで免許返納する人は、近年でも20人に一人、いるかないかだといわれています。ただ高齢ドライバーはそれぞれ事情も違うし、環境も違います。ある意味、じいじは事情にも、環境にも、恵まれたのかもしれません。

それでも、じいじにとって免許返納は、確実に自分の生活環境が変わる大きなことです。家族のためかもしれません。自分が加害者にならない、自分の名誉のためかもしれません。車に乗らない決断をしたじいじ。改めて、私はそんなじいじが大好きです。

広島清流ライオンズクラブ会長賞



夢に近づく為のアートマイル

尾道市立瀬戸田中学校

2年 菅 太一

自分の夢に近づくための手段として、今私たちの学校ではアートマイル国際協働学習プロジェクトに取り組んでいます。アートマイルプロジェクトとは、外国の学校の生徒とSDGsの何らかの目標について意見を交流し、一つの壁画を制作するという、大きなプロジェクトです。

私が通っている瀬戸田中学校は3年前からこのプロジェクトに取り組んでいます。私が入学した時、体育館に飾ってある壁画を見た瞬間感動し、心を打たれました。なぜなら私の夢が一つ叶うと、思ったからです。私の夢は海外の文化を知ったり、価値観を共有したりして、外国の人々と何かを創り出したり、開発してものをつくったりするというような職業に就きたい、という夢です。そして、その壁画を見たあと、私は先生にこの壁画はどういうものなのですかと尋ねてみました。するとこれは、アートマイルというプロジェクトなんだと教えてくださいました。そこで私はアートマイルは、私の夢に近づけるものだと思ったのです。だから2年生になった今、アートマイルに参加する立場になり、確実に夢に一步近づこう、と決意したのです。

今年の相手校はパキスタンに決まりました。私はこのプロジェクトを通して、初めてパキスタンについて調べてみました。調べてみてわかったことはパキスタンは人口約2億人ほどの国で世界人口5位の国だということです。また、八つの州に分かれており、プロジェクトの相手校のある州は首都のイスラマバード州というところで、衣食住それぞれの文化に歴史を感じるような文化も発展した国だとわかりました。

今回のSDGsテーマは、この飢餓をなくそうと、10の人や国の不平等をなくそうに決まりました。これからパキスタンの学校の生徒たちとどんな話し合いがプロジェクトでできるのか、とワクワクしてきました。

今現在では、まだ相手校とお顔を合わせていないのですが、自分たちのことを伝えようと英語での自己紹介に挑戦しています。英語は慣れていないので、少しうまく伝わるか緊張していますが、これから頑張って、正確に伝わるようにしっかりと練習していきたいです。

今回の「ジャパン・アートマイルプロジェクト」を通しての私の思いを一つ話させていただきたいと思います。今、世界ではいろいろな課題が山積みになっています。環境問題や同和問題、紛争や犯罪など見過ごせない重要な問題です。これらについて解決に向けて取り組んでいくにあたって、私は他者への意識を変えていかないといけないと思います。身近な人だけではなく、地域同士、海を越えて国同士までが他者にあてはまります。意識を変えるには、相手のことを今まで以上にもっと、さらに知る必要があります。相手の文化や価値観、願いなどだと思いますが、自分が思い願っているものとは違うのかもしれないかもしれません。しかしそこから共通点を見出し、互いに納得するような、部分で解決するのが一番だと思います。とても難しいことですが、一歩ずつ取り組んでいかないといけないのです。私はそういう違う価値観をもった人たちと話し合える、貴重な機会こそが、このアートマイルというプロジェクトだと思っています。

私はこれから自分の夢に向かって近づいていくために一つ一つの手段を一生懸命に取り組んでいきたいと考えています。だから、アートマイルというプロジェクトを成功させるために、今できることをクラスのみならず一緒に全力で取り組んでいきます。

必ず楽しみながら取り組み、夢に近づきたいと思います。



五感で感じることの大切さ

広島県立広島中学校

2年 河野 春 希

先日、小動物と触れあえるふれあい動物園に家族と行きました。その動物園には、20種類以上の小動物が狭い空間いっぱい飼育されており、たくさんの人が動物と触れあっていました。私は、いくつかのゲージに入った何十匹もの色とりどりの鳥や、水槽に入ったたくさんの鯉に餌をあげたり、亀の甲羅に触ったりして、動物の温もりや見たことしかないような皮膚やうろこの感触を楽しみました。特に、私が気に入ったのは、オウムです。ひまわりの種を見ると、自分から「こんにちは」と話し、餌を催促してきます。何度か餌をあげていると、とうとう餌を見ることもなく「こんにちは」と話しはじめました。短いやり取りの中で少しだけですが親密さが生まれたような気がしました。

この経験を通して私は、動物と接したり、触れあったりする機会をもっと大切にするべきだと感じました。普段はあまり動物と接する機会はなく、ネットやテレビの画面を通して動物を見ることが多くなりました。そのせいで、実際の動物の「命の温もり」とふれあうことは減ってしまったのだと思います。

また、ネット上で知ったように思っていた動物は、実際とは大きく異なっていました。ネット上には、動物のかわいさばかりを重視したものや、特別な一部分だけを切り取ったようなものが多くあります。しかし実際は、腕や指を近づけると怒ってかみつき服に穴を開けてしまう凶暴なものや、何もせずただじっとしているようなものもあります。一人の男性にとっても懐いていて、その男性が来ると踊るように全身を動かして喜んでいましたが、他の人が近づくと噛みついてくるようなオウムもいます。このオウムは、お気に入りの男性が遠くの窓に映るだけで嬉しく大騒ぎし、「帰るよ」という言葉で寂しがってまた大騒ぎするそうです。「鳥は賢い」といいますが、知識として分かっていることと、目の前の鳥から感じる賢さは同じものではないと実感しました。

技術が発展してたくさんのことがインターネットやAIでできるようになり、ほとんどのことを知れるようになりました。それによって便利になった反面インターネットで見ればばかりで、実際に体験することが減ってしまったのではないのでしょうか。

これは動物に限った話ではなく、例えば山登りをする機会は減ったと思います。実際に山登りをしなくてもVRなどでその場所の景色をリアルに見ることができるようになりました。大変な準備をしなくても山の風景を楽しめるようになった一方、本物の自然と触れ合う機会は減ってしまったのではないのでしょうか。ネット上の動画や画像を見るだけで知った気になり、実際の山道を一步一步進んだり、自然の空気を吸って、深呼吸をしたり、昆虫や植物などの自然の生物と触れ合ったり、といった本物の自然を体感することが少なくなってしまうかもしれません。

先日、母に連れられ近くの山を散策しました。山道は歩きにくく、上り坂はきつく、歩いていても歩いても同じような風景ばかりが続きます。テレビ番組で見ると、山はドローンなどで俯瞰された状態で映されるので、木々の様子や天候だけで美しく感じる人が多いです。しかし、実際に歩いてみると前述したとおり山道の中は同じような景観が続きます。虫もいるし、普段あまり動かさない筋肉を使い軽く筋肉痛になってしまいました。しかし、嗅いだことのない枯葉や芽吹き香り、アスファルトではない土の感触などは、どれも唯一無二のものだと感じました。

確かに、いろいろな情報を知ることが大切なことです。ネット上にあるたくさんの情報を正しい知識として手に入れることで、視野を広げることにつながり、より多くのことを考えられるようになります。また、最近のAI技術の革新はすばらしく、病気を治したり新しい技術を発展させたりするなど、未来への道が広がる、ということもあるでしょう。しかし、知識を得ることと、実際に体験することは違います。私は今回の経験を通して、自分の体や五感で実際に感じることを大切にしていきたいと思いました。

優 秀 賞



笑顔と愛情で郷土を繋ぐ西中貢献隊

庄原市立西城中学校

3年 栗 栖 陽 愛

私の故郷西城町は、人口は少ないですが、豊かな自然の中でネギやお米、ゴギ等の美味しい物が豊富に取れる町です。ちなみにゴギは綺麗な水の中にしか生息しない天然記念物の魚です。

そんな自然豊かな町で育った私達西城中学校生徒、略して西中生は、2年生で職場体験学習に行きます。職場体験先は何と…地元の農家さん。そこで農業体験学習を行います。皆さんは、普段から豊かな自然に触れている私達がなぜ、農業を体験するのか疑問に思いませんか。私達も何で今さら農業？ と思っていました。しかし、いざ体験してみると、私達は意外にも地元の農業について知らないことが多いことに気付きます。例えば西城特産ヒバゴンネギ。どう植えられて育ち、収穫されて商品となるのか私達は何も知らなかったのです。さらに農家さんの「美味しい物を食べて笑顔になってもらいたい。」という思いに触れることで、農作物はちゃんと育ててくれる人がいるからこそ、皆さんの手元に届くこと、そこには農家さんのたくさんの技術とそれを支える情熱が込められていることに気付きました。そのためか農業体験に行く前と後では、同じものを食べているのに、野菜などの味が全く違うように感じました。私は気付くことで単なる理解を越え、感覚まで変わったのだと思います。

そして農業体験を終える頃には、農業体験に行くのは、仕事の大切さややりがいを学ぶだけでなく、私達がこれまで育ってきたこの町を知り、感謝の気持ちを持って、地域貢献するためなのだと考えるようになりました。私達の胸には、お世話になった農家さんに何か恩返しはできないか、西城の農作物の素晴らしさを自分達で広げていけないかという思いがふつふつと込み上げてきました。

そこで私達は、西中生として地域貢献するという意味で西中貢献隊と名乗り、株式会社「飛翔」という模擬会社を立ち上げました。そして地元のイベントに参加し、農家さんの農作物販売を手伝い、地元西城を盛り上げるというミッションに挑むことを決めました。「会社の株式は笑顔と愛情」の合言葉の元、マーケティング部、PR部、店構えやパッケージをデザインする部を作り、それぞれの部署で準備を重ねました。

そして迎えた本番。私も初めは緊張しましたが、農家さんのため、地元西城を盛り上げるためと思うと自然に大きな声になり農作物の魅力を必死にPRしていました。結果は…、全ての農作物は「あっ」という間、正味1時間で完売し、見事に大成功。農家さんへの恩返し、地域貢献ができたという達成感と嬉しさでいっぱいになりました。

このように職場体験は私達に大きな変化をもたらしましたが、これは私達の代だけではありません。一つ上の先輩はこの体験を経て自分達で畑を作り、野菜を育てる取組にまで発展させました。西中ファームと名付けられたその畑は今私達が受け継ぎ、野菜を作っています。そして、この自作の野菜をどう活用するのかが、飛翔の第二のミッションとなりました。地域全面協力の下、会社の総力を挙げて考えた結果、地元の人が集う食堂に自作の野菜を提供し、それを使ったレシピを自分達で考え、その料理を出してもらえることになりました。後日、多くの方に喜ばれたと聞き、安堵と共にまたもや嬉しい気持ちでいっぱいになりました。誰かのための行動は自分自身も幸福にしてくれるのだと実感しました。

私は中学3年生。あと半年で西中貢献隊は卒業ですが、これまでの取組を後輩に繋げ、大好きなこの町と農作物を多くの人に知ってもらえるよう、今後も西中貢献隊OGとして、地域の人々が笑顔になれるような活動を続けていきたいと思っています。

優 秀 賞



広がれ！ 竹原の魅力

竹原市立賀茂川中学校

3年 上 野 夢 華

転出超過 広島3年連続最多

このニュースをみなさんは知っていますか。中国新聞に載っていた記事の小見出しです。総務省の「住民基本台帳人口移動報告」によると、地元を離れ、他の県へ行ってしまう人の割合が、日本で一番多いのは、広島県だそうです。しかも3年連続です。

広島県の実態を知り、私が住んでいる竹原市は、どのような状況なのだろうと思い、竹原市統計書を見てみると、令和4年度の転出は737人、令和3年度の転出は890人と、毎年多くの人が竹原市を離れている現状がありました。これは危険な状況です。

このまま転出する人が増えてしまうと、竹原市はどうなるのだろう。消えてしまう、なんてこともありえるのかな。

私は、竹原市が大好きです。これからも竹原市で生活をしていきたいと思っています。それなのに、どうしてこんなにたくさんの人が離れてしまうのでしょうか。

原因を友達と考えてみました。どんな時に地元を離れてしまうのかを考え、進学や就職の時ではないかという結論になりました。竹原市には大学がありません。そのため、大学進学をするなら市外にでるしかありません。自分が専門的に学びたい分野が広島県になれば、広島県を離れることとなります。そのまま県外で就職をし、竹原市に戻ることがないのでしょう。竹原市には、企業が少ないので、自分が希望する職がなければ、竹原市から離れていかざるをえません。また、若者が好きそうなお店が竹原市には少なく、ライブ会場やスポーツ競技場など、余暇を楽しめる施設もありません。これは、先ほど述べた企業が少なくとも関連すると思います。

大学進学で県外へ行ったとしても、竹原に戻ってきてほしい。そして、竹原で生活をする魅力を知ってもらいたいです。私が竹原の魅力が一番実感したのは、職場体験学習で地域のホテルに行った時のことです。そこでは、県外からの修学旅行生や団体での宿泊客が多く見られました。フロントで接客をしていると、竹原のお土産を楽しそうに選んでいるお客さんが大勢いました。竹原を楽しんでくれている人がたくさんいると感じ、とても嬉しくなりました。

私には、飲食店を開いて竹原を、そして、広島県を活性化させるという夢があります。地元で作られたものを活用し、竹原市内で飲食店を開こうと考えています。今ある一次産業が盛り上がるよう、三次産業を増やしていきたいのです。私のようにお店を行う人が増え、竹原に来る人が増えれば、竹原をターゲットにほかの企業がやってくるかもしれません。すると、働く場所が増え、竹原市で働こうと思う若者が増えるかもしれません。

竹原市で行われている一次産業。牛、コメ、じゃがいも、たけのこ、れんこん、ぶどう、塩、はちみつ。これらの食材を活用した料理や飲み物を販売していきたいと考えています。どんな料理が楽しんでもらえるかな。若い人にも、年配の方にも楽しんでもらえるものを作りたい。夢が広がります。そうして、地域の方々はもちろん、竹原に住む人以外にも私のお店で、私が作った料理を食べてもらって、竹原の良さを知ってもらい、笑顔になってほしい。そうやって、竹原市が活気のある場所にしていきます。私は、自然豊かで、食べ物もおいしい、竹原が大好きです。その魅力を多くの人に知ってもらうために、私が行動していきます。



変わってやる

尾道市立重井中学校

3年 築 島 実奈美

「ねえ。私はどうして卓球をしているの？」ふと、自分にそう聞いてみたことがあります。普通、何か熱心に取り組んでいる人は答えることができるだろうという問い。しかし、私は答えることができませんでした。一体私は、卓球を続けてどうなりたいのだろうか。周りの音が聞こえなくなっていました。

小学5年生の夏頃、友達に誘われたのがきっかけで、私は卓球を始めました。ラケットに球が当たる音、靴が擦れる音。それまで卓球をしたことがなかった私には、全てが輝いているように見えました。その日、初めて私は卓球に触れました。ラケットを借りて、打つコツを教えてもらいながら、球出しをしてもらいました。今では、当たり前のようにできるフォア打ちも、そのときはボールが返せることだけで嬉しいと感じました。私は卓球をすることが好きになりました。

それから私は練習を続け、中学1年生になりました。そのとき、「それ」は訪れました。上手くボールが返せる。思ったようにラケットが振れる。自分の中で「上手くなってる」と思うようになったのです。その年の新人戦で、私はベスト16という今までで一番の結果を出しました。何より県大会に行けるといううれしさが一番で、何か大きな壁を破ったような気がしました。今思えば、卓球が一番楽しいと思える時期だったと思います。

しかし、「それ」は長くは続きませんでした。中学2年の春、私は新しい場所でも卓球を覚えてもらうようになりました。そこでは厳しい指導もあり、私のやる気は上がっていました。「今よりもっと上手くなれる。」そう、思っていたはずでした。

結論から言うと、私はなかなか思うようにプレーすることができなくなっていました。自分よりも遅く始めた子に勝てない。それに、その子たちの方が、自分よりも上手に見える。「自分のほうが、ずっと練習しているのに。」そう考えるようになってしまいました。私は、自分の中で「上手くなってる」と思えなくなっていました。

そう思いながらも月日が経ち、中学3年生になりました。この春にあった南部地区大会、私はベスト16という結果でした。はたから見れば、良い結果かもしれませんが。県大会の切符も持っているのですから。しかし私は、満足できませんでした。なぜなら、試合の途中で何度も諦めてしまったからです。何度も「もう無理かも。」「県大会には出られるからいっか。」そんな言葉が頭をよぎりました。その日、私は応援に来てくれた祖母にお礼を言うために、電話をしました。そうしたら祖母は、私のことをこれでもかというほど褒めてくれたのです。「ベスト16だったのに？ 周りの子はベスト8だったり、決勝までいったりした子もいるんだよ?」と思いました。それと同時に、「こんなにも、自分のことを褒めてくれる人がいたのに、私はすぐに諦めてしまったのか。」と思いました。腹の底から悔しさがこみ上げてきて、思わず泣いてしまいました。やはり、悔しかったのです。このとき、私は心に決めました。

「変わってやる。今の自分から。」

これらの出来事から気付いたことがあります。それは、自分は勝手に負けを決めていたということです。実際、どれだけ点が離れていても、試合が終わるまで、どちらが勝つなんて、誰にも分かりません。自分は物事をネガティブに考え過ぎているのだと思います。だから、卓球を楽しめないのです。これからは、もっとポジティブに考えていこうと思う、きっかけとなりました。

今、もう一度、自分自身に問いかけてみます。

「ねえ、私はどうして卓球をしているの?」

今なら答えることができます。

「それはね、今の自分から変わるためだよ。」

優良賞



つなぐ想い

広島市立三入中学校

1年 藤井 美月

「いいかい。人にされたこと、してあげたことは忘れなさい。でも、してもらったことは忘れちゃだめだよ。」

これは、7歳のとき母に言われた言葉です。当時私は、スイミングスクールに通っていました。ある日のことです。プールサイドで、反対側から歩いてきた人が、私の肩にぶつかってきたのです。「ごめんね。」の一言を期待した私ですが、何も言ってくれません。私は母に、「あの人、ぶつかってきたのに、何も言ってくれなかったよ。」と言いました。そのとき母が言ってくれた言葉が先ほどの「人にされたこと、してあげたことは忘れなさい。でもしてもらったことは忘れちゃだめだよ。」です。けれどこれは、母の言葉ではなく、私のひいおばあちゃん言葉だそうなんです。

ひいおばあちゃんは、私が小学1年生のときに96歳で亡くなりました。私は小さかったので、いつもニコニコ笑っている小さいおばあちゃん。くらいしか覚えていません。そんなひいおばあちゃんには、昔、好きな人もいて、学校の先生になりたいという夢もあったそうです。しかし、当時は戦争の真っ最中なんです。結局、夢をあきらめ、和裁学校に通い就職します。そして食べることに困らないから、という理由で百姓の家に嫁いだそうです。もちろん、だからこそ私が生まれたのですが、ひいおばあちゃんは幸せだったのだろうか、と私は思いました。時代のせいでも自由な恋愛も、夢も諦めないといけなくなり、誰かや何かを恨みたくならなかつたのだろうか、と。けれどその答えがある言葉に詰まっていることに、私は気付いたのです。されたことを覚えていても苦しみが続くだけだし、してあげたことを覚えていても見返りを求める人間になるだけで、幸せな生き方ではないからです。だからこそ、自分の思いや願いが叶わなくても、そこにこだわりすぎなかつたことでひいおばあちゃんは幸せだったんだらうと私は思いました。

この、ひいおばあちゃん言葉を教えてくれた私の母は、学生時代にひどい嫌がらせを受けたことがあるそうです。けれど、今はその相手ととても仲良しです。私だったら絶対に許せないと思いますが、母は、「もう謝ってもらったし、そんなこと気にしても仕方ないし、今楽しかったらいいよ。」と笑っています。母もひいおばあちゃんの教えの通りに生きているのです。思いのつながりを感じて私は「すごい」と思いました。

けれど、私はまだ二人のようにはなれません。例えば、体育の前、教室に教科書を忘れたことに気づいて慌てて取りに戻ってみると、私の筆箱だけその場に置き去りで、友達は先に行っていました。「ここまで筆箱を運んであげたのは私なのに、持って行ってくれないじゃん。」私の心には不満が生まれました。「やってあげたことを少しは返してほしい。」と思ってしまうのが、まだ今の私です。けれどこんなこともありました。私が小さいころ入院した友達に手紙を書いたことがあります。何年かあと、突然その友達に「あのとき書いたよ。」と言われたのです。その友達がずっと覚えていてくれて、それを伝えてくれたことで、私はとてもうれしくて幸せな気持ちになれたのです。

私はまだまだひいおばあちゃんの思いを完全に受け継ぐことができていませんが、その大切さはよく分かります。ひいおばあちゃんや母が過去にとらわれず今を見て生きることで幸せをつかんでいるように、私もこれから家族や友人と一緒に、幸せな気持ちを分かち合いながら生きていけるようになりたいです。

優良賞



口和の伝統を継ぐ

庄原市立口和中学校

2年 長里 凜

「すごい! カッコいい。」

私は一瞬で神楽に目を奪われました。鮮やかな衣装や楽器の音色、何よりもその舞いの迫力に圧倒されました。

私が神楽を初めて見たのは小学校1年生の頃です。父が参加している神楽団の演技を見にいくとそこには、いつもの父とは違う演者としての姿がありました。また、演者として堂々と神楽を舞う神楽団のみんなの姿に引き付けられました。

神楽をやってみたいという気持ちは年を重ねるごとに強くなりました。そして、中学1年生のとき、弟と一緒に地元口和の神楽団に参加することにしました。小さな頃から憧れてきた神楽に参加できる喜びと期待、私にできるのだろうかという不安と緊張で心がいっぱいになりました。弟も私と同じように期待と緊張が半分半分の表情でした。

しばらくして、地元の祭りで神楽を披露することが決まり、私は弟と共に「鐘」を演奏することになりました。神楽で用いられる鐘は、重く、持ち手がゴルフボールのように丸くなっており、想像以上に難しく感じました。「本当に私に演奏できるのだろうか」「みんなに迷惑をかけてしまったら…」と心配や不安が募りました。練習中もスピードの調節や鐘を斜めに打つ特別な打ち方による指の痛み、弟と息を合わせることなど、上手くできないことが多く、重さ以上に鐘がどんどん重くなっているように感じました。そんな中、私を支えてくれたのは、父と、神楽団の仲間でした。

焦りを感じていた私に声をかけ、丁寧に教えてくれる父は神楽演者の先輩としても父としても、とても頼もしかったです。また、神楽団の仲間にも支えてもらい、私は少しずつ自信をつけながら、本番当日を迎えることになりました。

当日の光景や感動は今でも心に焼き付いています。圧倒され、食い入るように見つめる観客の様子。舞いが白熱すると、奏楽のテンポも上がり、観客から送られる声援。神楽を演じる側と観る側の気持ちがそろっていくような感覚を覚えました。演技が終わると観客から惜しみない拍手を受けました。これまで観る側だった私が初めて観客の前で神楽ができていたり会場が一体となっていることに深い感動と達成感を覚えました。

その後、神楽を観た地域の方から「すごくカッコよくて、パワーをもらえた」「来年も期待しているよ」と声をかけてもらいました。私は口和の神楽団のみんなのことを、そして神楽という伝統を誇らしく思いました。

この日をきっかけに私はさらに神楽に夢中になりました。それと同時にこの伝統を守らなければならないという使命感を持ちました。

そのために私にできること、それは神楽を続け、素晴らしさを広めていくことだと思っています。神楽のよさを学校でも発信したいと思います。そして、今日、この会場の皆様にも神楽のよさをアピールしました。口和は人口減少や少子高齢化が進んでおり、このままでは伝統が受け継がれなくなってしまうかもしれません。私たちが神楽を通して口和に元気と感動を与え続け一人でも多くの人に、興味を持ってもらいたいです。父と弟と、そして神楽団のみんなと神楽を踊り続け、口和の伝統をこれからも継いでいきたいと思います。



一人ではできないこと

坂町立坂中学校

2年 木村 結菜

私が家族のやさしさに気付いたのは苦しかったときでした。

小学6年生の時、私は委員会で委員長を務めました。最初はどうしたらよいか分からず、担当の先生や副委員長と一緒に考えていましたが、そのうち一人で考えるようになってしまいました。私は昔から人に頼る事ができませんでした。「一人で考える方が早い。」「これぐらいで頼っていいのか?」といろいろなことを考えては別に大丈夫だと自分に言い聞かせ、頼ることから逃げていました。そして一人だけで頑張っているうちに、たくさんの不安をかかえてしまいました。そして結局、どんなに一人で時間をかけて計画したことで他の意見でくつがえってしまったり、変わってしまったりしました。人をまとめることの大変さを知りました。

あの時私は全部一人でかかえ込まないといけないのだと思い込んでいました。周りは助けてくれないのだと本気で思っていたのです。毎日くるしくて泣いていました。

そんな時、姉が何度もなぐさめてくれました。元気を出すよう励ましてくれて、手伝おうとしてくれました。また、母が他の案をだしてくれて、一人でかかえ込んでしまう私を怒ってくれました。それが私にとっての救いでした。苦しくて苦しくてどうしたらいいかわからなくなったとき何度も救ってもらいました。その日から少したった日、これが優しさだと気づいたのです。

それから支えられながら頑張っていると、ある時兄が大きな長方形の紙をくれました。それには「唯一無二の私の妹、生まれてきてくれてありがとう」という言葉の絵が描かれていました。こんなに優しい言葉は初めてで嬉しくて私は泣きそうでした。これも家族からの優しさだったのです。

ほかにも、私は家族に助けられた日がたくさんあります。例えば、授業で広島県のある市について調べ、新聞を書いたときです。そのとき私は尾道市を選びました。パソコンや本で調べようとしていると、母が、「尾道市に直接行ってみないと分からないことが絶対あるよ!」

と言いました。まさか行くとは思っていなかったからびっくりしました。尾道市の、背脂の乗ったラーメンや未来心の丘、耕三寺などいろいろなことを経験しました。未来心の丘のまぶしい純白さや自然ととけこんだ神秘さは現地に行かないと分からなかったと思います。また、本やインターネットだけでは伝わらないことがたくさん分かりました。あの新聞は、母と父が連れていってくれなかったらできなかったと思います。

私はいろいろなことを自分一人で頑張っていると思ってしまうときがあります。けどそれは違います。気付いていないだけでたくさんの人に助けられているのです。言葉で助けてくれたり、行動で助けてくれたりたくさんのことをしてしてくれていると思います。それに気付かないのはもったいないことです。一人だと考えてしまうと視野が狭くなり、大切な人を傷つけてしまうかもしれません。周りに仕事を押しつけている人と一人だと思い込んでいる人に周りの人が助けてくれているということを知ってほしいです。

私は人に頼ることが下手で、かかえ込んでしまうくせがあります。でも周りの人が知らず知らずのうちに守ってくれているのです。だからこそ今度は私がその人たちを守りたいと思います。これからも一人だと考えてしまうことがあります。そのたびに周りのやさしさに気付きたいです。だからこそ私は家族の優しさに気付くべきだと思います。



十三才の初挑戦

尾道市立高西中学校

1年 栗村 紗菜

私はバイクに乗ったことがありませんでした。まだ、中学生だから運転できないのは当たり前ですが、父がバイクを持っていて、「一緒に乗ろう。」

といつも言ってくれていました。しかし、バイクは危ないとの思い込みから父と一緒にバイクに乗ることはありませんでした。

中学生になった私は、塾に通い始めました。週末は塾まで自転車で行かなければなりません。塾までの道のりを教えてもらおうと、父に相談するところかえってきました。

「バイクで行こう。自転車と同じようなものだから。」

私は、バイクに乗ることに不安な気持ちがありましたが、この日は天気もよく、なんだか行きたい気持ちになったので、父のバイクに乗って行くことにしました。父は、私の前向きな返事に少しびっくりした様子でしたが、なんだか笑っているようにも見えました。

靴をはき、バイクの前に立つとなんだかドキドキしてきました。ヘルメットを被り、乗り方を教えてもらっている時も、ドキドキが強くなるのが分かりました。目的は、塾までの道のりを覚えることですが、それよりも初めて父の運転するバイクに乗るドキドキ…。いよいよ出発です。バイクのエンジンがかかり、ゆっくり進んでいきます。自転車とも車とも違う、今まで感じることのなかった風の冷たさや心地よさ。不思議と鼻で大きく空気を吸い込んでいました。父からは、塾までの道のりを教えてもらいながら、自転車はどのように運転したら良いかを教えてもらいました。道を走っている自転車の運転をバイクから見たとき、自転車に乗った私がどのように動いたらバイクや車は動きやすいのか、どうすれば安全なのかを知ることができました。塾までの道のりはあっという間でした。

塾までの道のりがわかったことを父に伝えると、「もう少し走るか。」

と言われたので、私は行くことにしました。この時には、バイクに対する危ない気持ちや不安な気持ちはもう全くありませんでした。バイクに乗りながら、森やトンネルに入ると風が冷たくなることを肌で感じ、スピードが出た時の風の爽快感を全身で感じました。また、周りの景色がいつもと違うことに気がつきました。車から見る景色は、生まれてからずっと見続けている見慣れた景色ですが、バイクから見る景色は同じ景色でも違って見えました。なんだか自分が動いているのではなく周りが動いているような感覚です。

危ない、という思い込みから避けてきた一つの挑戦。塾までの道のりを教えてもらうという小さなきっかけから始まった、新しい発見。バイクに乗るという体験から感じることでできた、別の視点から見る重要性和挑戦することの大切さ。今生きている私の世界は、いろんな挑戦が待っていて、それは私自身が飛び込まなければ何も感じることはできません。私はまだ13才。これから先、選択に迷う場面が多く出てくると思います。しかし、それまでに多くのことに挑戦して、迷わず思いっきり飛び込める人になりたいです。そして、周りの人が何かに挑戦しようとしている時に、笑って背中を押してあげられる人になりたいです。私の知らない世界をもっと知るために、これからは少し殻を破って飛び込んでみよう。



「結果良ければすべて良し」という考え方

三次市立吉舎中学校

1年 井上 愛梨

バレーボール部での試合中、相手チームに連続で点を取られてしまい、自分たちのコート内の雰囲気が悪くなってしまった先輩方をベンチから見っていました。ファイナルセットまで持ち込み、最終的には勝利を勝ち取った時、私は、「途中危なかったけど、勝ってよかった！」そう思いました。これは、「結果良ければすべて良し」という考え方に当てはまります。

「結果良ければすべて良し」という言葉をみなさんはどう思いますか。結果が良ければそれまでの過程はどうでもいいという人もいれば、結果よりもそれまでの過程の方が大事という人もいます。私は部活動を通して、「結果だけでなく過程も大事にしたい」と考えるようになりました。そう思ったきっかけが二つあります。

一つ目は、勝利を勝ち取り、優勝した試合後の振り返りで先輩方が、「あの時の雰囲気は良くなかったよね。」
「自分たちならもっと良いプレーができたはず！」

と、自分たちの反省点を話し合っていたことです。結果は結果として喜ぼう。でも、結果が良かったからといって、それまでの全てが良かったわけではないと自分たちで気づき、さらに次の良い結果に繋げようとしていました。バレーボール部としての目標は県大会出場です。そこで良い結果を出すために、それまでの練習や試合をとっても大事にしていました。

二つ目は、私がその試合でピンチサーバーとして出場したことです。
「サーブ打ってき！」

そう言われた私は、ネットを超える確率が未だ低い状態で試合に出るのが嫌でした。サーブをミスするということは相手に1点を与えるということです。結果、私の打ったサーブはネットに届かず、失点してしまいました。試合の振り返りのとき、私は反省点としてサーブミスを挙げました。それに対して先生や先輩方は、「サーブを打ちにコートに入ったことも、今日のために今までサーブ練習を積極的に参加していたことも良かったよ！」

と、励ましてくださいました。その時、私が持っていた「結果」という考え方が、とても視野の狭いことのように感じました。先生や先輩方は、私の2年後の結果を見据えてくださっていたからです。私はまだ1年生です。これからどんどん上手くなります。私のミスはどうやっても成功にはならないけれど、私の成長には確実に繋がっています。今日の経験は、私が3年生になったときのバレーボール部で良い結果を出すための、大事な過程でした。

私たちにとって結果は大事なものです。部活動や勉強、行事等に良い結果を求めます。しかし、一つの大会に勝つことも、一本のサーブを入れることも、結果とするにはとても小さいものではないでしょうか。最終的に自分がどう成長したかが、私たちにとっての結果だと考えます。それを踏まえて、「結果良ければすべて良し」と言えるような過程の努力を、惜しみなく続けることが大切だと思います。



夢は無くても

三次市立八次中学校

3年 西川 惺莉奈

私はかつて、夢がなく、何をするにしてもすぐに逃げ出してしまって長続きせず、思ったことが思うようにできない自分が「大嫌い」でした。

そんな私に、母もしびれを切らして「ああしなさい。こうしなさい。」と言いますが、やっぱり私は何もしないし、何も話さないのでもとの関係は悪くなっていきました。そのうち、家に居ることさえも嫌になり、私は部屋に閉じこもってネットに逃げ込むようになりました。ネットには色々な人が居ました。私とよく似ていて同じような境遇の人。私よりも苦しい思いをしている人も。ネットではリアルな自分を隠せます。だからこそみんな本音が言えたのでしょうか。ネットは私にとって唯一の隠れ家になりました。

そうするとネット以外の所がとても窮屈に感じるようになりました。学校も同じでした。周りの子は行きたい高校や将来の夢がすでにあって、それに向かって頑張るんだと言いますが、夢が無い私はつまらない人だと言われているようで、学校に居ると泣き出してしまいそうでした。だから学校には行けなくなりました。なにもかもがどうでもよくなってしまった時期でした。

ネットは気楽でした。そこでは何でも言えます。普段の私を知る人はいないので違う人になった気分でした。「苦しいなら逃げて正解だよ。」と私を認めてくれる人がいました。しかし、「当たり前でしょ。向き合わなかった結果だよ。」と、ぐさっとくることを言う人もいました。ある日、「死ぬ」というコメントが来ました。それも一人ではなく、「死ぬば？」と何件も来るようになりました。私は恐くなりました。ネットの中では何でも言える。そうです。リアルな自分を隠せたからこそ何でも言えた私と同じように、酷い言葉もいくらでも言える。私が傷ついたって関係ない。ネットの恐さを知りました。その日、私はアカウントを閉じました。

身近にも、私と同じように学校に行くことにしんどさを感じている人が居ました。彼女は自分も悩んでいたのに私の話を良く聞いてくれました。いつだったか、夢が無いんだという悩みを彼女に軽い感じで話した事がありました。誰も分かってくれないだろうと思っていたのに、彼女は「分かるよ。」と言ってくれました。それから随分経った頃、ふと彼女が言ったのです。「小さな夢を持ってみたいんじゃない？」と。私は言っている意味がよく分かりませんでした。「小さな夢」って何だろう？ 一日中考えて「あれが食べたい。」「ここへ行きたい。」みたいな感じかな？ と胸に落ちました。周りの人にとったら、ちっぽけで、つまらないことだと思うかも知れませんが、何もかもどうでもよくなっていた私にとっては、何かしたいという「小さな夢」が本当に久しぶりで、とても大きな気付きでした。もしかするとこの続きに「こうしたい」「こんな人になりたい」という気持ちがあるのかな？ と思いました。その日から心がとても楽になりました。夢がないことをとても恥じていた私ですが、彼女のひと言で大きな一歩を踏み出した気持ちになりました。

このことを彼女にすぐに知らせたくて毎日待っていたのですが、彼女はずっとお休みでなかなか会うことができませんでした。そんなある日、彼女から一通の手紙をもらいました。それを読んで、私も彼女の心の拠り所になりたいと思い手紙を返しました。受け取った彼女もとても喜んでくれていたと聞いて嬉しくなりました。そこから二人の文通が始まりました。学校の様子や「あれを食べたよ。」とか「これを読んだよ。」とか些細なことを報告し合いました。

今、私はネットの中の人ではなく、リアルな友人と手紙の中で「小さな夢」の話をしています。「夢」のなかった私は、大きな夢を答えられません。しかし、小さな夢なら答えられます。今の私の夢は彼女と早く会いたいということです。会って、彼女の話をたくさん聞きたいです。彼女が私にしてくれたように、私も彼女に寄り添ってほしいと思っています。

基準特別賞



響と奏と碧

広島市立可部中学校

3年 柴村 碧

私の名前は、「碧（あおい）」です。私が小学生の時、名前が「碧」になった理由を父に聞きました。すると、父はある友達の話を始めました。その友達は性同一性障害で、自分の性に違和感を感じ、男性から女性への性転換手術を受け、その後、戸籍の性別も変えて、名前を男らしい名前から、女らしい名前へと変えたそうです。大変な経験をした彼女ですが、彼女にとって一番辛かったことは、親からもらった名前を変えたときだったと父に語ったと聞かされました。父は、彼女からそのことを打ち明けられた時、自分の子供のことが頭に浮かんだといいました。そして、もしも将来、自分の子供に性別を変えて、名前を変えたいと言われたら、自分はどうするだろうかと…。だったら、そうなってもいいように男でも女でもいい名前にしておこう。そうすれば、我が子に少しでも辛い思いをさせないですむかもしれない。父はそう考えて私の名前を「碧」にしたと教えてくれました。

私はこの話を聞いた時に初めて「性同一性障害」という言葉があることを知りました。性同一性障害について調べてみると、自分の生まれもった身体の性と心の性が一致していない状態であること、それだけでなく、性同一性障害の人が、生きづらさを感じて生活していることも知りました。でも、どうして性同一性障害の人が、世の中を生きづらいと感じているのでしょうか。私なりに考えてみました。

今の日本では、一人一人の「普通」が違うのは当たり前だといいいながら、いざ違いを目の当たりにすると、みんなそれを認めようとしません。ピーマンで考えてみましょう。ピーマンを嫌いな人は多いですが、中には好きな人だっています。ピーマン好きを公言すると、ピーマンを嫌いな人は、それが悪であるかのように嫌な顔をします。ピーマン好きにとってピーマンを好きなことは特別ではなく「普通」のことだから、嫌な顔をせず認めてほしいのに。誰だって「普通」の基準は異なっているはずで。でも、こんな日常の些細なことも「普通」が違うことを私たちは許そうとしません。特に、少数派である性同一性障害の人とそうではない人との「普通」が違うと、それを認めようとしない傾向が強くなるように思います。

そもそも、性同一性障害は障害なのでしょうか。実際に、WHOでは性同一性障害を精神障害の分類から外し、その名称も「性別不合」に変更しています。私自身、性同一性障害を障害だとは思いません。なぜなら、「障害」という言葉は、その実態とかけ離れているからです。「障害」という言葉がもつイメージが先立つせいで、周囲と壁が出来てしまい、家族や親しい人に相談しづらく、生きづらい環境が作られてしまっていると思います。一人で思い悩むことほど心細いものはありません。少数派である性別不合の人たちを守り、気軽に相談できる環境を作るためにも、日本で「障害」という言葉を使うのを止めるべきです。

これらのことから、私は、私たち自身が当事者として、ちょっとした違和感にも目を背けず、現在、起こっている問題に高い意識をもって行動や発言をすること、そして、性別や名前などに左右されず、その人の内面を見つめ、認め合っていくこと、そうすることで性別不合の人たちの生きづらさが解消されていくのではないかと考えるようになりました。きっと「性別不合」に限らず、「人種差別」や「男女差別」など、様々な問題を抱える人たちが生きやすい世の中は、誰にだって生きやすく、心地よい世の中のはずです。そういう世の中をイメージし、そこをゴールと定め、道を広げていくことが、今の私たちに求められていることのような気がします。

私の父は、自分の子供が少しでも悲しい思いをしなくていいようにと、私の二人の兄に「響（ひびき）」と「奏（かなで）」、そして私に「碧」と名付けました。でも、近い将来、誰もが生きやすい世の中になって、父の名付けの時の思いに「杞憂だったね、とーさん」と言えるようになることを、今、私は心から願っています。



審査員長

比治山大学非常勤講師

和田 晋

発表者の皆さん、本当にお疲れ様でした。応募総数が3,300人を超える中学生の中から皆さんは書類審査で選ばれて今日16名の方が立派に発表してくださいました。

今はどのような気持ちでしょうか。審査の内容についてお話しする前にお願いを申し上げます。

皆さんはここにたどり着くまでにいろいろな事があったと思います。私たちは詳しく分かりませんが、実は去年の本大会では残念なことに一人が参加できませんでした。今年は16名の皆さんが元気に立派にやり終えて、そして私どもに感動を与えてくださいました。そのことに対して審査員を代表して、発表者の皆さんに本当にありがとうございますと感謝の気持ちを伝えたいと思います。会場のみなさんをお願いしたいのですが、今日見事に発表をし終えた16名の皆さんによく頑張ったと称える拍手を送っていただけませんかでしょうか。皆さん、本当によくやりきりました。

今回は特に1年生3名が発表をしてくださりフレッシュな感動を覚えました。1年生ですよ、大きな勇気がいるし、足は震えていたのではないのでしょうか。私も中学校時代に弁論大会に出た時に、諸先輩を前にして足が震えながら話す恐怖心を今でもよく覚えています。こうした県大会のような大きな大会で1年生が堂々と発表してくださったことに私は今後の可能性を強く感じます。そして、2年生・3年生の発表もその学年にふさわしい堂々たる発表だったということ喜びあいたいと思っています。

これから11名の審査員を代表して審査内容についてお話しします。つい先ほどまで別室で激しく真摯な話し合いを行いました。後に結果発表がありますけれども、本当に紛糾しました。発表に甲乙つけられなくて当初予定されていた授賞の数を増やすほどの厳しい審査会になりました。

では、具体的にその審査内容についてお話しします。まず、最初に基準発表をしてくださった可部中学校の柴村碧さん、素晴らしい発表でした。感情的に訴えることなく落ち着いた論理的な発表で、基準発表としてこれ以上ないほどの安定感がある発表でした。私はこの基準発表が堂々と始まったがゆえにその後続く15名の方々の発表がスムーズに進んだと思っています。そういう意味で基準発表者の柴村さんにありがとうございますとお礼を申し上げたいと思います。

審査の内容は皆さんに事前にご案内していますが論理性と表現力です。発表する内容にみんながそうだなと思えるような論理の展開がうまくなされているか、もう一つは表情豊かに発表内容に即した話し方・表現ができてきているかを私どもは審査いたしました。

先ず良かった点から申し上げます。一つ目に身振り手振りを使わず、また相手に伝わりにくい言葉を使うのではなく、相手意識に立って本当に相手のことを考えた自然な喋り方で伝えていただいた点です。それが聴く者にとっては非常によく伝わる発表になりました、特に、データを挙げて「何パーセントで」というような、誰が聞いてもよく分かるような根拠を「新聞では」あるいは「こういう携帯ツールでは」というふうに自分が調べたものを具体的に相手に伝えることは非常に大事なことです。その丁寧な発表を審査員は評価しております。

二つ目にいま世界情勢が非常に厳しい中で戦争やコロナなどの発表がここ数年は多くありました。今年はそういう内容よりは家族、部活、学校、友人関係、ネットなどの自分に近いところの話題が多くなりました。これは今年の大きな特徴でしたし、その点を高く評価したいと思います。自分の身近なことから自分の考えをまとめながら、視野を開いていくことはとても大切なことだと思います。ただ審査員から願いとして出たことは自分ごとで終わってほしくないことです。言葉というツールを使うのは人と関わり人とつながるためです。自分ごとでよければ日記に書いておけばよく、やはり自分が感じたことを他者に語り伝えながら自分を磨いていく。そういった点において自分の世界にとどまってほしくはない、誰かと一緒に生きていくという前提でいろいろなことを身近な問題から世界へつないでいく視点を大事にさせていただきたいと強く思いました。

一人の審査員の方がこう話されて私はドキッとしましたが皆さんはいかがでしょうか。「ウクライナの話はあったけれど日本の過去の戦争の話題はなかったね」。もちろん日本はいま戦争状態にはないかもしれませんが。しかしながら、原爆を含め日本の歴史に残る戦争も忘れてはいけない事実だと思います。ましてその体験者が私たちの身近には共に生きているわけですから、私たちが社会に目を開きながら自分の身近に感じたことと忘れてはならない事実とつないでいくという作業は大事なことだと思います。

課題点をいくつか申し上げます。これからのみなさんにエールを送るために厳しいことを申し上げます。会場には指導者の方もいらっしゃると思います。審査員会では非常に厳しい意見が飛び交いました。そこを発表者の皆さんを励ます意味で敢えて皆さんにお伝えしますのでしっかり受け止めてください。

一つ目は話し方が上手なくて大変惜しい結果になった人がいることです。どんなに内容がすばらしくても話し方によって印象はガラッと変わってしまいます。ある審査員が「伝える」と「伝わる」は違うと話されました。その通りだと思います。自分は伝えようと思っても、その自分の思いが相手にきちんと伝わっていなければ言葉としての機能は完結しないのです。今日、発表してくださった16名の方、自分では伝えているつもりだったでしょうが、聞く立場としてはどうだったのだろうか考えてみてください。特に今日は一堂に会しているいろいろな仲間の声を聞いたわけですから。それを受け止める自分はどうだったのでしょうか。そういう他者意識ということをご自分でしてさらに自分の話し方を点検していただきたいと思います。具体的に申し上げますとメリハリをつけた話し方、マイクの使い方、間のおき方などを工夫するともっと良い発表になったと思います。私が感じたことをズバリ申し上げますと、原稿に目がいくようでは相手に意見がきちんと伝わらないと思います。私も皆さんの前で話す時にももちろん事前に原稿は書きます。しかし、話す時の本番では皆さんの反応をみながらお話をしています。原稿を見ながら読んでいては、失礼な話し方になると思います。私はいかなるときも原稿は見ませんでした。皆さんに一流の話し手になっていただきたいので、原稿は見ないで堂々と顔を上げて話していただきたい。本番はまさかの時のために原稿を置いているのであって、話を聞いてくださっている方をしっかり目力でとらえながら話すことができる自分を目指してください。

二つ目に論理の展開が甘いということです。急に自分はこういう生き方をしますというような急な展開になっている発表がありました。審査員は発表の最初からしっかり耳を傾けて聞いていますが、途中でどうして急にこんな話になってしまうのだろうかと考えさせられます。発表者自身は分かっているのですが、聞いている者はそのつながりがわからない、話の展開に無理があるのです。相手意識に立つということは相手のためにも論理の展開をしっかり作っていくことが大事になると思います。そういう点で皆さんに今日書いていただいた原稿をもう一度見直していただいて本当に相手に伝えるためにはどんなところが抜け落ちていたのだろうか、あるいはこのことと次のこととの間のつながりは本当にこれで良かったのだろうかというように捉え直しをしていただきたいと思います。厳しいことを申し上げましたが、指導者である先生方におかれましては、その論理展開における事実のつなぎ方についてご指導いただきたいとの声も審査員会で出されたことをお伝えしておきます。

三つ目はタイトルの付け方です。もっと工夫してタイトルをつけましょう。去年よりは良くなりましたという意見もありましたが、私はまだまだタイトルについて考えてほしいと思います。たとえば12番の中岡玲央菜さん「偏見にとらわれない」というテーマで発表をしてくださりました。そのタイトルを見るとどんな偏見だろう、社会にも私達にも偏見はあります。どんな偏見にふれるだろうかという、そのタイトルからひきつけられました。タイトルをつけて文章を作るのではなく文章を作り最終的に皆さんに聞いてもらうタイトルはどうあるべきかと考えていただけたらもっと効果的な発表になったと思います。

話し方が惜しいということをお知らせしましたが出色だったのは、9番の菅太一さん、10番の大段りあさんでした。菅さんの場合には読み方に自信をもって読んでいて、その安定感が伝わってきました。大段さんの場合は、実に表情豊かで、顔の表情がいろいろ変わって相手を引き付けていきました。あえてこの方々の名前を出したのはその話し方についてみんなで学び、練習し磨くことによって聞く立場の人が本当に聞きやすく安心して耳を傾けることができる、そのような伝え方をしてほしいからです。もう一度申し上げます。「伝える」ということと「伝わる」ことは違うことを、皆さんに改めて考えていただけたらと思います。

私は従来から思っていますけれども言葉には力があり、場合によっては魔力を発するものだと思います。言葉がうまく使われれば、相手に正しく伝わり幸せをつくります。しかし、言葉一つの使い方でも相手を傷つけ相手との関係を切ることもあります。今日発表していただいた11番の西川惺莉奈さんは本当に話しにくいネットの中での問題をストレートに話していただきました。そういう自分の心にある闇といいますか、それに向き合って「私はこういう生き方をしたい」、「友達を大事にしたい」というような心からの叫びとも言える発表でありとても貴重な意見でした。審査員会では話しにくい内容についても勇気をもって発表していただいて、とても良かったと評価する意見があったことをお伝えしておきます。

結びにこの大会を実施するのにたくさんの方々のご支援があって今日の大会が実施出来たと感謝いたします。私はいつも思うのですが、こういう意見発表を聞いて心が大きく揺さぶられます。聞くべきは多くの大人ではないでしょうか。大人こそが社会の一人として、この子どもたちをつぶさない、このような子どもたちこそを更に支援していきたい、そういう気持ちを持って今日発表した16名の皆さんの言葉を心に深く刻みたいと思います。発表してくださった16名の皆さん、本当に立派でした。心から未来へのエールを送り審査のまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

(以上)

「少年の主張」・中学生話し方大会2024

第46回「少年の主張」広島県大会開催要領 第58回中学生話し方広島大会開催要領

- 1 趣 旨 国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子供たちには、論理的に物事を考える力、自分の主張を正しく伝える力、広い視野と柔軟な発想や創造性などを身につけることが求められている。
この大会は、中学生が話すことによって伝える力を育み、学び合う機会となるとともに、意見発表を通して、中学生への理解と認識を深めてもらうことをねらいとする。
- 2 対 象 広島県内の中学生
- 3 主 催 公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟
独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 4 協 賛 国際ソロプチミスト広島、広島清流ライオンズクラブ、
公益財団法人広島青少年文化センター
- 5 後 援 広島県、広島県教育委員会、広島市、広島市教育委員会、広島県公立中学校長会、
広島県私立中学高等学校協会校長会、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、
広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送
- 6 開催日時 令和6年9月7日（土）10：00～14：30
- 7 日 程 9：30～10：00 受付
10：00～10：15 開会行事
10：15～12：30 発表
12：30～13：30 昼食
「少年の主張」全国大会のDVD上映
13：30～14：30 審査発表、表彰、閉会行事
- 8 開催場所 広島県社会福祉会館 2階 講堂（広島市南区比治山本町12-2）

（注）諸事情によっては、日程及び運営等を変更する場合があります。

- 9 発表内容 次のA、B、Cの中から、日ごろ心に思っていること、考えたことや感銘を受けたことなどを、自由にユニークな発想と、飾り気のない言葉でまとめたもの。
なお、未発表、自作のものに限ります。
また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。
A 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
B 家庭、学校生活、社会（地域活動）または、身の回りや友だちとの関わりなど。

C テレビや新聞などで報道されている社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

- 10 発 表 小道具は、使用しない。
発表時間は5分程度（400字詰め原稿用紙4枚程度）
ただし、6分を超えるものは審査対象外となりますので、ご注意ください。
- 11 応募方法 申込書に原稿を添えて、中学校長を經由して提出する(原稿は返却しない)。
ただし、市町、青少年育成市町民会議等の類似の大会で入賞した中学生の応募も可とする。
この場合、市町等においてその旨を付記して、市町等から提出するものとする。
原稿は原則**400字詰め原稿用紙（A4判縦書き）**を使用すること。(学校等で使用されるB4判縦書きも可とする)。
生成AI等を利用して作文の原案を作成したり、自作の作文を推こうするなどということは行わないこと。
- 12 申込締切 **令和6年8月2日（金）必着**
- 13 事前選考 提出された原稿を主催者において審査し、大会出場者を決定する。なお、大会の出場資格を得た者については、各中学校長等あてに8月中旬に通知する。
- 14 審 査 審査は、学識経験者、マスコミ関係者、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成広島県民会議及び広島県中学校話し方連盟並びに協賛団体の代表者によって構成する審査会で行う。
- 15 表 彰 広島県知事賞、(公社)青少年育成広島県民会議会長賞、広島県中学校話し方連盟会長賞、国際ソロプチミスト広島会長賞、広島清流ライオンズクラブ会長賞（各1名）、優秀賞（若干名）及び優良賞を選考し賞状を贈る。
- 16 副 賞 この大会で、広島県知事賞、(公社)青少年育成広島県民会議会長賞、広島県中学校話し方連盟会長賞、広島清流ライオンズクラブ会長賞、国際ソロプチミスト広島会長賞を受賞した5名には、副賞として海外研修が(公財)広島青少年文化センターから授与される。
時 期：令和7年夏休期間の5日間（予定）
訪問先：大韓民国（予定）
- 17 そ の 他 この大会で、広島県知事賞を受賞した者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構主催の「少年の主張」全国大会（11月24日（日）東京で開催）への出場候補者として推薦する。
- 18 問い合わせ先 公益社団法人青少年育成広島県民会議「少年の主張」係
申込み先 〒730-8511 広島市中区基町10-52（広島県環境県民局県民活動課内）
電話 082-513-2742 ファクス 082-511-2173

審査員及び審査基準

1 審査員

審査員長	和田	晋	比治山大学非常勤講師
審査員	石原	剛	広島市教育委員会指導第二課指導主事
//	江種	則貴	公益社団法人青少年育成広島県民会議副会長
//	嶋田	宗雄	広島清流ライオンズクラブ会長
//	関根	紗絵	広島県教育委員会義務教育指導課指導主事
//	田原	直樹	中国新聞社論説委員
//	樽谷	和子	公益財団法人広島青少年文化センター 理事
//	中島	典子	国際ソロプチミスト広島会長
//	中村	好宏	広島県環境県民局県民活動課長
//	藤本	恵	広島県中学校話し方連盟顧問
//	堀井	洋一	NHKチーフ・アナウンサー

(五十音順、敬称略)

2 審査の基準

概ね次の点を採点ポイントとし、内容、論旨、表現、態度等総合的に評価を行う。

- ① 鋭い感性で、新鮮な主張であるか。
(柔軟な発想に基づく意見や提言、未来への希望や夢・メッセージ、新しい情報や視点など)
- ② 具体的な内容とともに、一般性・社会性の広がりがあるか。
- ③ 提案や提言を実現・実践する意欲や積極性が感じられるか。
- ④ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
- ⑤ 発表に熱意が感じられ、迫力があるか。
- ⑥ 主張の内容が感銘と共感を与えているか。
- ⑦ 説得力のある話し方であるか。
- ⑧ 発表の早さや間のおき方、姿勢が適当であるか。

内閣総理大臣賞 受賞作品

一隅を照らす

宮城県 栗原市立栗原南中学校

3年 ケイバージーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？ この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで35年もの間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学4年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」
「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」
「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、4年生からは、日本で生活しています。

6年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていた勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかったので、ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」

そう思うことが何度もありました。どうしようもなく泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人たちが話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありますが、今は、日本で勉強ができてることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ話、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で (وی ئړک هڼ انښور چنوک)。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。

「家庭の日」に関する作文・図画

特選

ぼくのひいおばあちゃん

竹原市立竹原西小学校

6年 小谷 奏太

ぼくのひいおばあちゃんは、お父さんが子どものころに亡くなってしまったので会ったことはない。でも原爆の日が近づくと、ひいおばあちゃんの話になる。

1945年8月5日は日曜日だった。鳥取県倉吉市から3才の子どもを連れて広島市の比治山の陸軍で働いている夫に会いに行った。家族3人で楽しい夜を過ごして、よく日の6日の朝に「じゃあまたね。」と夫と別れ子どもと2人で広島駅に向かっていっていると中で原爆にあったのだ。

夫も子どもも死んだ。

ひいおばあちゃんの背中にも大きな火傷のあとがあったが、その後原爆の話はなに一つしなかったらしい。

戦争が終わって一人ぼっちになったひいおばあちゃんは再婚して、そこでぼくのおじいちゃんが生まれた。

そして、おじいちゃんとおばあちゃんが結婚してぼくのお父さんが生まれた。それからお父さんとお母さんが結婚してぼくが生まれたのだ。

ぼくは考えた。

もしも戦争をしなかったら、ひいおばあちゃんが原子爆弾にあっていなかったら、ひいおばあちゃんの人生は大きくちがっただろう。

それと同時に、おじいちゃんも、お父さんも、ぼくも生まれていなかったはずだ。

そう考えるとゾッとしたが、ぼくは今、生きている。

ぼくが生まれる前に両親と両祖父母の4人の命のつながりがあり五代さかのぼると64人、十代さかのぼると1,024人にもなるらしい。この中のだれ一人かけてもぼくは生まれていないのだ。

「たくさんの方がそれぞれの時代を一生けん命生きて命をつないでくれたおかげで奏太がここにいるんだね。」とお母さんが言った。

そんな事、これまで深く考えたことはなかったが本当にそうだなと思った。

「奏太の命は奏太だけのものじゃないんだよ。たくさんの方が奏太に関わっているんだよ。感謝を忘れずにね。」とお父さんが言った。

今年も8月6日がもうすぐだ。

原爆投下から79年目になる年だ。

ひいおばあちゃんのことを考えながらいのらうと思う。そして、まずは自分の周りを、「平和」にしていこうと思う。

「ありがとう」や「ごめんね」の言葉を言う、認める、許す、寄りそう、助け合う、相手を知る、ちがいを理解する、色々あるけどぼくができることから少しずつやっていこうと思う。そして、ぼくから平和の輪が広がって欲しい。

広島市立城山北中学校

2年 中小城 咲衣

私の祖母は、お好み焼き屋をしています。いつもお店に行くと笑顔で「いらっしゃい」と迎えてくれます。お客さんとも笑顔を絶やさずいつも楽しそうに話をしている、祖母と話しているお客さんも笑顔になっています。私は周りの人を笑顔にできる祖母を自慢に思います。

以前、気になってどうしていつも笑顔でいることができるのか聞いてみました。すると、「笑顔でいることは、来てくれたお客さんに感謝の気持ちを伝える方法の一つなんよ。」と教えてくれました。確かに、祖母は来てくれたお客さんにいつも、

「来てくれてありがとう。」

と笑顔で言っています。ただ「ありがとう」と伝えるだけでなく、心からの感謝の気持ちを込めている祖母の言葉だからこそ、祖母の気持ちが伝わってお客さんも笑顔になっているのだと思います。

そして、

「普段から笑顔でないと幸せが逃げていってしまうよ。」と祖母は曾祖母に教えてもらってから、いつも笑顔でいることを心がけているそうです。私が産まれる前に曾祖母は亡くなってしまったので、話したことはないですが、曾祖母は自分の子供にいつも笑顔でいることで幸せにいてもらいたいという子供を思う気持ちから、祖母にその言葉を教えたのだと思います。祖母が何十年もその言葉を忘れることなく、いつも笑顔でいることを心がけられているのは、曾祖母の祖母への思いが祖母に伝わったからだだと思います。その話を聞いて、改めて笑顔の大切さが分かった気がしました。私も家族で食卓を囲い、ご飯を食べながら何でもない話をしていると、自然と笑顔になり、うれしくなります。曾祖母が祖母に教えてくれた通り、幸せを感じているなと思いました。

何かができるから嬉しいとか、何かを貰って嬉しいとかではなく、当たり前だけど家族と一緒に居ることができ、楽しく話すことができ笑顔になれることは、とても幸せなことなんだと思いました。私は、普段家族と居ても、ただただテレビを見ていたり、スマホを見ていたり、家族とせっかく居ても会話をすることがないときがあります。そういうときは、私も家族も笑顔になっているはずもなく、むしろムスツとした顔になっているかもしれません。このようなときは、祖母が曾祖母に教えてもらった通り、幸せが逃げているのだと思います。せっかく家族が居るなら、こういう時間をなくすことを心がけていきたいです。家族と何でもない話をして、笑い合うことができる時間は幸せな時間です。家族だからこそ、普段感謝の気持ちを伝えることは恥ずかしいと思います。なので、そういう時は「ありがとう」の一言だけでも気持ちを込めて伝えていきたいと思います。

三次市立吉舎中学校

2年 藤川 晟太

僕は、祖父母、父母、妹、弟の7人で生活しています。赤ちゃんのときから一緒に生活している祖父母や、一緒に剣道を頑張っている父母、妹、弟のおかげで僕は寂しいと思うことなく、楽しく生活することができています。しかし、この幸せな生活が当たり前ではないことを僕は最近になって知りました。

4歳。保育所のもも組のとき、母と2人だけで生活していた時期がありました。僕がネフローゼ症候群という病気であることが発覚し、母と2人きりの入院生活が始まったからです。このとき、僕は友達に会いたいとか、おもちゃが欲しいとか、寂しいとか、そんなことは思いませんでした。家族である母がずっと隣で支えてくれていたおかげです。家族みんなの支えもあって、6歳の時に病気を治して退院することができました。そして最近になって、僕が入院していたときの家での家族の生活を教えてもらいました。

僕が入院していたとき、妹はまだ2歳でした。妹は毎日夜になると、

「お母さんはどこにいるの？」

と泣いていたそうです。妹は2年間も母が家にいない生活を続けていたこと、それをずっと寂しがっていたことを、僕は教えてもらったことで初めて知りました。毎週末、家族みんなでお見舞いに来てくれていた僕の楽しみな時間に、妹は何を考えながら一緒に過ごしてくれていたのだろうと、今になって考えるようになりました。しかし、僕は母がいない生活をしたことがありません。僕たちを産んでくれたとても大切でかけがえのない存在の母がいないことを、妹がどれだけ悲しくて寂しかったか、僕にはわかりません。でも、妹は僕に、

「お母さんを独り占めにするな。」

なんて言ったことは一度もありません。記憶にあるのは、僕が家に帰ったとき、妹が一番に出迎えてくれたことです。幼かった妹の気持ちを考えると、僕は胸の奥がきゅっと締め付けられたような感覚になります。

いつも当たり前と一緒にいて楽しく笑いながら過ごすことができるのは、みんながそれぞれ思いやりを持って生活してくれているからだと気づきました。大切で、かけがえのない家族のことをしっかり考え、これからは僕も家族を支えて笑顔にできるよう過ごしていきたいです。

東広島市立西条小学校

1年 山口 瑚 遥

きょねんの11がつのおわりにあかちゃんがうまれました。3ばんめのおとうとです。わたしは4にんきょうだいになりました。ぱぱとママの6にんかぞくです。あかちゃんがうまれるまでの10かげつは、いままでとはちがうまいにちになりました。

4がつ、ねんちょうさんになりました。しょうがつこうにはいるじゅんびのため、

①じぶんのことはじぶんでやる。

②かぞくできょうりょくする。

③むりなときは、ぱぱとママにおしえてもらう。

この3つができるようにもくひょうをたてて、まいにちをすごすことにしました。すこしずつできるようになり、なつやすみにはいりました。

あるひ、ママのびょういんについていくと、せんせいのよこのもにたーに、あかちゃんがみえました。おまたにはゆらゆらしたものがみえたので、「おとこのあかちゃんがおなかにいるの？」とママにききました。「そうだよ。」とママ。びっくりとうれしきで「いつうまれるの？ たのしみ！」とおおきなこえができました。

そのひから、ママのようすがきになりはじめました。ぱぱとわたしたちのからだはかわらないけど、ママのからだはかわってきました。おなかがおおきくなり、こしもいたい、きもちわるくてたべられないなど、いろいろなことがありました。わたしたちきょうだいは、ママのからだをやるため、5キロのおこめをもっていえのなかをあるいてみました。さいしょはもてるけどずっとはこんなにおもいなんてしらなかった。おなかがおおきいからしたもみえないし、すわるのもたいへんだなあ。それからは、せんたくものをほすのは、きょうだいでやることにしました。さいしょはたいへんだったけど、きょうりょくすればできることがわかりました。

いつものように、ようちえんのあさのじゅんびをしているとママが「おなかがいたい。」といってびょういんにいったら、にゅういんになりました。じいじとばあばがいえにきてくれました。

つぎのひ、ぱぱとふたりでびょういんにいくとママはてんてきをしていました。つよいいたみがきたらわたしはせなかをおしました。

しばらくして、あかちゃんをうむへやにいどうしました。じょさんしさんがえぷろんをつけながら「もうすぐあかちゃんにあえますからね。」せんせいは「すきなところでみていいよ。」といってくれたので、せんせいのちかくでみました。うまれてきたあかちゃんはすこしむらさきいろでとてもちいさく「かわいいなあ。」といました。

いまでは8かげつ。かおはまんまる、てあしはむちむち、はは2ほんえがおもかわいいはいはいもできる。たのしいまいにち、
「おうちにきてくれてありがとう♡」

三原市立糸崎小学校

2年 岡野真拓

「なつ休みいっぱいあそんでね。」

「おう。まかせとけ。」

ぼくのおとうさんは、あそびのたつ人です。ゲームするよりもぜんぜんたのしいあそびをたくさんしていて、いろいろおしえてくれます。ぼくは、おとうさんとあそぶのが大好きです。なつ休みは、おとうさんも長い休みがあるのでまい年たのしみにしています。今年は、二つのあそびにチャレンジしました。

一つ目は、かい水よくです。おねえちゃんとぼくでおとうさんのいるところまできょうそうしました。おねえちゃんにはまけたけどおとうさんにタッチすると、

「まあくん、すごいじゃん。」

と言ってごほうびにおもいきりたかくなげてくれました。イルカになってうみの上をジャンプしたようですごく気持ちよかったです。すなはまで、なみがくるぎりぎりのところに足をおいているとすながとけていくみたいになくなってあなができることもおしえてくれました。水の石きりあそびがうまくできなくてあきらめようとした時、おとうさんが、

「こしまでうみに入って水の上ギリギリをねらって、うでを大きくぐっとうしろまでひいておもいきりなげるとせいこうするよ。」

とおしえてくれました。やってみると3回できました。ぼくはうれしくて、

「やったー。」

とガッツポーズをしました。

二つ目は、バーベキューの火おこしとはんごうすいはんです。ぼくは、うちわであおぐと火が風できてしまうと思っていたけれど、はんたいで火が大きくなってびっくりしました。はんごうすいはんは、本とうにできるのかなと思ったけど、いつもよりつやつやできらきらしたごはんができました。たべるとほくほくでおもちみたいでした。かんさつしていると、ゆげが出たり音がピチッピチッとなり出したり、おいしいにおいがしてきたりしました。ぼくのおなかがぐーっとなりました。おとうさんが、すこしたべて、

「はい。おいしい。」

と言ってぼくのおさらに山もりついでくれました。あっという間にペロりとたべました。つぎは、ぼくが一人で作ってみんなをよろこばせたいです。

おとうさんは、さかなつりやドラムのえんそうもおしえてくれます。おとうさんのつってきたさかなやイカは、しんせんでこりこりしています。ぼくのおきにいはメバルのおさしみです。ぼくもいつか、おとうさんみたいにさかなをつつておいしくりょうりして、みんなをえがおにしたいです。ぼくのおとうさんは、みんなをえがおにするのがじょうずです。ぼくもあそびのたつ人になるために、わくわくしたらなんでもチャレンジして、おとうさんからもっとたくさんいろいろなことをおしえてもらいます。これからもよろしくね。おとうさん。

東広島市立小谷小学校

2年 福 廣 遥 翔

ぼくにはいもうとがいます。名前はとあです。きょ年の夏にうまれて、もうすぐ1さいになります。ぼくといもうとはとしが7つはなれていて、お母さんお父さんといっしょにおせわをしたりしています。

ぼくは、いもうとをにこにこえがおにするのがすきです。歌をうたってあげたり、いっしょにおもちゃであそんであげるととてもうれしそうにわらってくれてぼくもうれしくなります。なので、学校からかえるのが楽しみになりました。

いもうとがうまれる前はゲームをしてあそぶのが日っかでした。今ではいもうとをえがおにしてあげるのがぼくの日っかです。うまれたばかりのころはにこっとわらうだけだったけど、今はきゃっきゃと声に出してたくさんわらいます。かわいいえがおにぼくは元気をもらっています。かぞくみんなのえがおもふえて明るいきもちになります。いもうとが持っているパワーはすごいなとおもいました。

いもうとは、ほかにもいろいろなきもちをえがおで表げんしておしえてくれます。たとえば、ごはんを食べるときのうれしいやおいしい、ぼくが学校からかえったときのおかえりもにこにこです。上手にたつことができたときもえがおでおしえてくれます。ぼくはだんだんといもうとのいろんなきもちがわかるようになりました。そしておせわもとても上手にできるようになりました。いつのまにかいもうとのえがおでぼくがせいちょうさせられていました。

これからもいもうとにはずっとえがおでいてほしいです。たくさんの人をえがおで元気にしてほしいなとおもいました。

広島県立三次中学校

1年 久保井 逢花

皆さんは、家族をどのような存在だと思えますか？ 私は、とても大切に自分の精神の安定に欠かせない存在です。私が家族に対してそう思うのにはある理由があります。

ある日、私は学校で嫌なことがありイライラしながら帰っていました。帰ると、母はすぐに私の様子に気が付いて

「どうしたの？ 何かあった？」

と言い、あいづちを打ちながら

「そうだったのね。しんどかったね。」

と笑顔で聞いてくれました。全て話したら心がスッキリとし、冷静になることが出来ました。母は人を包み込んでくれるような優しい人です。その場にいるだけで安心してリラックスすることが出来ます。

母だけではありません。私の父は、とても面白い人です。どんなにしんどくて気分が悪くても、父の言葉に笑いが止まらなくなります。私のことを思って元気づけてくれていると思うと、心が暖かくなり、嬉しい気持ちになります。また、父は家族一のポジティブです。例えば、父に相談ごとをすると

「大丈夫！今日は悪いことばかりじゃなかったでしょ？ 良いこともあったはず！」

と必ず言います。そんな様子を見てネガティブな私でも大丈夫か、何とかなるよねと思わせてくれます。自分だけでなく他の人もポジティブにすることができる父はすごいと思います。このポジティブ精神でいくつもの壁を超えてきた父は、尊敬するし、大好きです。

私には妹がいます。とても優しく可愛い妹です。疲れて学校から帰ってきたとき毎日欠かさず

「おかえり、逢花。」

と笑顔で言ってくれます。この言葉で、湯船に浸かった時のように疲れがなくなります。妹は、私の癒しのような存在です。しかし、こんな妹でも喧嘩になることは多くあります。と言っても、どちらが残り一つしかないクッキーを食べるかなどの小さな喧嘩です。こんな時、私は

「クッキーは私が食べたい！」

と何の解決にもならないわがまを言ってしまいます。そんな時、妹は解決策を考え、提案してくれます。だから、いつも穏便で公平に解決することができます。ただ自分だけが良ければ他の人はどうでも良いという考え方ではなく、どちらも公平になるように工夫するという考え方ができる妹から私は様々なことを学んでいます。

このように、私の家族はお互いを尊重し気遣う事が出来ます。私は将来、こんな家族をつかって、ずっと幸せに楽しく過ごしたいと思っています。だからまずは母、父、妹を見本にして、自分を改めようと思います。

広島市立可部中学校

1年 佐々木 優

ぼくの家族は、いつも明るい父さんと料理が上手な母さんと食いしん坊の犬のティムとぼくの4人家族だ。

ぼくは小さいころから、空手をしている。小学校中学年から県外の試合に出るようになった。初めて県外の試合に出た時は衝撃だった。レベルが違いすぎて。そこからぼくたち家族の戦いが始まった。

ぼくは、それから県外のレベルに追いつくために毎日家で練習した。道場に通う日数も週2から週3に増やした。

毎日の練習は、家族で取り組むようになった。父さんが仕事から帰ってきてからミット打ちや組み手をしてくれた。父さんはぼくの攻撃を受けてたくさんあざができていた。それでも毎日休まずに練習をしてくれた。

父さんにはまだまだかなわないから全力で向かっていける。でも、母さんにはいつのまにか、軽いミット打ちでも出来なくなった。ぼくより弱い母さんに攻撃するのが怖かった。でも、母さんは客観的なアドバイスをくれたり、家から1時間かかる道場までのおくりむかえをしてくれた。

犬のティムは毎日の練習中、いつも見守ってくれた。ぼくが練習中くやしくて泣くとすぐにかげよってくれた。時どきティムも練習に参加してきて場を乱す事もあったけどなくてはならないとても大事な存在だった。そうして家族で戦ってきた。

たくさん時間がかかったけど県外で準優勝出来るくらいになった。

試合ではセコンドにいつも父さんが入ってくれている。いつも必死に声を出してくれているけど、ぼくは緊張して父さんの声が全然耳に入らない。それでも、一緒に戦ってくれているとは伝わる。

母さんは、ぼくと同じくらい緊張している。動画を撮る手がいつも震えるらしい。母さんも一緒に戦ってくれている。

空手は、一人で戦う競技だけど家族も一緒に戦ってくれていると思っている。

東広島市立磯松中学校

1年 佐藤 恵衣

来年の1月から私達は、父の仕事の関係でアメリカのテネシー州に行くことになりました。私は来年アメリカに行けることが、とても嬉しいです。なぜなら私はずっとアメリカに住むことにあこがれていたし、英語が好きだからです。

私の母は大学時代アメリカに住んでいたため、アメリカが大好きです。その母の影響で私と姉は小さい頃から英語の本を読んだり、テレビを見て育ちました。これまでに何度かアメリカに旅行に行きました。そんな私達ですが、父からテネシーに行くと言った時、喜び以上に不安で一杯になりました。なぜならテネシーに住むということは、新しい環境でがんばらないといけないからです。そのため、今まで以上に家族が力を合わせて乗り越えていかないとはいけません。

私の父は英語があんまり得意ではありませんが、テネシーでは会社の中で日本語を話せる人がほとんどいません。その他に日常生活の中でも英語を話すことがたくさんあります。父が困っているときは私、母、姉で助け、サポートをしたいと思います。

私の母は体が弱く、4年くらい前からこかん節を痛めていて、あまり無理ができません。だから毎日、マッサージやストレッチをしないと体が痛くなるそうです。今は仲の良い整体の先生に体を見てもらっていますが、アメリカでは、医りょうのシステムがちがうし、料金も高いので、お医者さんに簡単に通えなくなるかもしれません。だから私と姉で母の負担をできるだけ減らせるようにお手伝いをしたり、マッサージなどを手伝って、お母さんがアメリカでも元気で過ごせれるように協力したいです。

私の姉は来年から高校生になります。英語は得意ですが、高校の勉強は難しいし、レベルが高いので、現地の学校のペースについていけるかどうか不安だそうです。

私は来年から中学2年生になります。私は英語の読み書きが得意ではないし、知らない単語もたくさんあります。だから学校の授業についていけるか、友達ができるか分からないので不安です。姉と私はアメリカの学校のレベルについていけるように積極的に勉強をがんばってきたいです。そして分からないことがあるときは、学校の先生に相談してサポートを受けたいと思います。

アメリカに住んでいると、これまで書いた以外にも大変な困難にぶつかるかもしれません。でも、たとえ大きい問題にぶつかってもいつも家族みんなで力を合わせて協力していきたいと思います。

北広島町立豊平学園

7年 原 田 唯

私は、毎日夕食の時間になると、その日にあった出来事やさまざまな話題を家族に聞いてもらっています。

私の家は6人家族です。祖父、祖母、父、母、姉、そして私です。夕食では、食事に手をつけずにテレビを見ていたりふざけていたりすると注意されることがよくあります。仕方なく黙って食べていると、今度は祖母が、
「なにか楽しいお話を聞かせて。」

と言うので、おしゃべり好きな私は、勢いにのって、学校での出来事や友達のこと、好きな芸能人のことなど、さまざまな話をしてしまいます。もちろん、テストの点が低かったこと、友達とけんかをしてしまったことなど、楽しくない話をしなければならない時もあります。ですが、私が話をもち出すと、家族はどんな話題でも聞いてくれて、質問や感想を次々に言ってくれるので、いつの間にか夕食の時間が話で盛り上がっています。そんな我が家の夕食は、ご飯もとてもおいしく感じられます。

今、世の中はSNSの時代になっていると言われていています。SNSのおかげで、自分の知りたい情報を早く手に入れることができるし、いつでもどこでも相手とメッセージをやりとりすることができます。私は動画やゲーム、アプリが大好きで、父や母が持っているスマホを貸してもらってよく見えています。それはマンガやニュースなんかより断然楽しくて、ついつい時間が経つのを忘れてやってしまいます。

けれども、最近スマホを長時間使用する小中学生が増え、動画やゲームに夢中になるあまり、家族と会話をしない子どもが増えていることを知りました。なかには「ネット依存症」になっている人もいます。

私は、そのことを知って、我が家の夕食の時のことを思い出しました。たしかに、ゲームをするのは楽しいですが、家族と会話をするのも大事なのではないかと思いました。家族と話すとそんなに面白いのかと思う人もいるかもしれませんが、ですが、実際に話してみると、友達と話すのと同じ感覚でコミュニケーションができ、意外に楽しいです。特に思いもよらない反応が返ってくると、私は、もっと話をしたくなります。また、悩み事などをアドバイスしてもらえると、前向きな気持ちになれて嬉しくなります。

私は夕食の時間が家族と会話のできる一番いい時間だと思います。それは、1日をふり返りながらおいしい食事ができるからです。まさに一石二鳥です。

ただ、家族と会話できる時間は夕食だけではないと思います。会話の苦手な人も、いつでも気軽に話してみると、良かったと思える時があるかもしれません。私もゲームはなかなかやめられませんが、夕食の時間はこれからも大切な時間にしようと思います。

廿日市市立七尾中学校

2年 神 垣 智

僕の祖母は、75歳で難病だということが判りました。小脳の病気で運動機能に影響を及ぼす病気です。長年、祖母は脚の不調やふらつきでしんどい思いをしてきましたが、どこで診てもらっても年齢相応だと診断されていました。

この病気が判った時、祖母は先の事を考えるとかなりのショックを受けたそうです。でも、祖父は違いました。即答で、

「よかった、命にかかわらなくて。私がいるから心配ないです。」

と、お医者さんに言ったそうです。祖母はそれが嬉しくて、頑張ろうと前向きになれたそうです。

祖父が診断結果を母に連絡してきた時も第一声は、「よかった。」だったそうです。それまでの祖父は人一倍心配性で、母と祖母は僕たち孫が発熱したり、怪我をした時は治るまで祖父には伝えないでおいたそうです。心配でそわそわして、祖父が怪我をしそうだったからです。その祖父が「よかった。」と連絡してきたことで、母も「メソメソしない。よかった。」と思えたそうです。母の僕たち家族への報告も「よかった。」から始まり僕の気持ちはとても楽でした。

それから数年経ちましたが、我が家は明るいです。祖母は杖をついてなんとか歩き、はっきり喋るのが難しい時もあります。その祖母の口癖は、「行けるうちに行く。」「できるうちにする。」です。そう言っでは、僕たち孫の運動会にもデイキャンプにも来てくれます。僕たちの好きなチャーシューや煮物を作ってくれます。体力的にも運動機能的にもしんどいと思います。僕は手を引いて歩くことくらいしかできませんが、祖母は、

「これが一番元気がでるよ。」

と言ってくれます。

それに比べ祖父の祖母へのサポートは凄いです。料理好きな祖母のお使いでスーパーへ行き、スマホで話しながら買い物をします。祖母はそれが楽しいそうです。お洒落な祖母は通院やりハビリにもお洒落をしていきたいので、ゆっくりで長いショッピングにも付き合います。生活するだけでなく、生活を楽しむサポートをしています。

祖父は80歳を超しているとは思えないほど体力があります。若い頃から、柔道やラグビーをしていたのもあるかと思いますが、今でも週2回はプールで2000メートル泳ぎます。食事にも気を遣い、とても健康的な生活をしています。「祖母とずっと一緒にいるため」と言います。

祖父はいつも前を向いています。お気楽なわけではなくて、将来をきちんと受け入れ、見据えた行動をとっています。お陰で祖母も僕たち家族も前向きになれ、今ではそれが普通の思考のようになっていきます。祖父の存在が僕たちを引っ張ってくれています。僕は、祖父から前向きな考え、行動が周りの人を元気づけ、明るくすることを伝えてもらいました。僕もそんな存在になりたいです。

三次市立吉舎中学校

2年 峠 埜 来 音

今年、私の妹は小学生になって、小さな体に大きなランドセルを背負って毎日小学校に行っています。少し前まで保育所に通い、一人では何もできなかった妹は今、いろいろなことが一人でできるようになりました。初めての小学校生活で、登校するときはよく泣いていたけれど、今では元気に登校しているところや、朝の準備もきちんとできるところ、お昼寝の時間がない小学校でも眠たくならなくなったところ等、日々成長した姿を見せてくれます。小学校生活の6年間で、妹がどう成長していくのか、とても楽しみになると同時に、もう私が手伝いをしなくても大丈夫になったことが増えて、ちょっとだけ寂しい気持ちでいます。

そんな成長の途中にいる妹へ、姉の私から二つのアドバイスを贈ります。

一つ目は、挑戦する気持ちを大事にすることです。初めから「できない」「絶対無理」などと思ってしまうと、なぜか本当にできなくなってしまう。けれど、「挑戦してみよう」「やってみよう」と思うと、不思議とできないと思っていたことができるようになったりします。私が小学生のときは、すぐに諦めて挑戦しようとしなかった分、できることの喜びも少なかったので、妹にはいろいろなことに挑戦して、「できた！嬉しい！」と思える体験をたくさんしてほしいです。

二つ目は、児童会に立候補することです。5年生の3学期になると、児童会選挙があります。私は、前期児童会役員になりました。選挙の日にはみんなの前で立候補した理由や公約を話す場面があり、とても緊張します。けれど、そこで自分の意見をしっかりと伝えることができれば、学校のリーダーとして認められ、みんなが協力するためについてきてくれるようになります。大変なこともあるけれど、みんなの役にたてることは嬉しいことでした。妹も、「こんな学校生活を送りたい」という気持ちがあるなら、望む学校生活を自分で手に入れることができるよう動いて欲しいと思います。

二つとも、小学校を好きだと思えないとできないことかもしれませんが。それでも、小学校生活6年間では運動会、社会見学など、保育所のおときにはなかった行事もたくさんあります。6年生になると、一大イベントの修学旅行もあります。時には嫌になってしまうこともあるかもしれないけれど、小学校生活を精一杯楽しもうとする気持ちを持つことがまずは大事だと思うよ。

6年間は長いようで短い時間です。入学から卒業まで、どのように生活するかは自分が決めることです。大事な妹には、宝物のような思い出を小学校でつくってほしいと思います。

三原市立久井中学校

2年 野々部 雄 大

「大丈夫？」

晩御飯の時に、父と母が何かを話していた。僕は気になって、

「どうしたの？」

と尋ねた。

「健康診断で血圧が高くて、病院に検査をしにいかないといけなくなったんだ」

と父は答えた。

後日、検査を受けに病院に行った父は高血圧と診断された。僕は、まだ高血圧がどんなものか、何がいけないのかわからなかったので、高血圧について調べてみた。

すると、高血圧は自覚症状があまりないけれど、血管が詰まったり破れたりして、脳にも障害を引き起こす脳卒中の危険があり、命を奪ってしまうような病気だとわかりとても心配になった。

晩御飯で話している時に父は、

「高血圧を治すにはバランスよく食べることが大切で、特に栄養が豊富なきのこやくるみとかを食べるのがいいんだよ」

と言った。

また、僕がジュースを飲んでいた時には、

「野菜ジュース飲む？」

と勧めてきた。

父は高血圧になってからいろんなことを調べて食生活を見直すようになった。そして、調べたことを僕たちに教えてくれるようにもなった。そのうち僕はだんだん食に興味を持ち、以前だったら行かなかったスーパーへの買い物に行き食材を探してみたり、飲んだことなかったトマトジュースを飲んでみたり、ご飯をしっかりバランスよく食べるようにしたり、僕の食生活は変わっていった。

そうしているうちに、僕だけでなく家族全員の食事の意識が変わってきた。父は菌を多く食べるようになった。母は肉ではなく魚中心の料理を作るようになったり、姉も赤、黄、緑の野菜をバランスよく食べたりするようになってきた。

さらに、僕は食べることにに関してだけでなく、料理の手伝いをしている時も、父が言っていた食材を使ったり、バランスを考えて母に「これ入れない？」と言ってみたり、健康を考えながら料理をすることが楽しくなっていた。

また、高血圧を引き起こさないようにするには、「運動が大切」と父は言っていた。だから、部活動以外でも外で運動しようと思った。例えば、一人でバレーボールをしてみたり、姉とバドミントンをしたりするようになったのだ。

父が高血圧になったことをきっかけに、家族の健康について興味を持ったことで、料理のバランスを考えることや、健康に過ごすためにはどのようにすればよいかを考えるようになったのだ。健康な体を保つために大切なのは食事と運動だ。そのために、食べ物の栄養を調べたり、家族に「外で遊ぼう」と声をかけ、運動する機会を作ったりしていきたい。

父の高血圧が判明したことで、以前までは健康についてあまり意識をしてなかった僕たち家族だったが、この機会を通してこれから家族全員が健康に過ごせる生活を心がけていきたいと思う。

東広島市立磯松中学校

2年 濱井 優那

私は、祖父としゃべる事が苦手だ。何をしゃべっていいのか分からない。どういう風に接すればいいのか分からない。父と母とも最近しゃべる事が面倒と感じていてそっけない態度をくり返していた。

ある日のこと、私の祖父が肺がんと診断された。母は、泣き崩れていた。私はその光景を見て事の重大さに気付いた。母は祖父の病名を告げられてからショックを受けて、しばらく寝込んでしまった。私に何かできることはないか考えた。母の負担が減るように家事を手伝った。母に学校での楽しい出来事など明るい話をたくさんした。すると母は次第に元気になっていった。祖父の病気を受け入れて、気持ちを切り替えることができたらしい。それから手術までの期間、いろんな検査があり何度も病院に付きそっていた。

手術の前日、祖父は入院した。私も母と一緒に祖父のところへ行った。祖父は、明日が手術だというのに一切不安な顔をせず、楽しそうに話をしていて安心した。でも本当は不安でいっぱいだったと思う。私たち家族に心配をかけないように気丈にふるまっていたのだと思う。そんな家族思いな祖父を私はカッコイイと思った。

手術当日、祖父は歩いて手術室に入っていった。手術は6時間かかった。待っている間、不安で不安で仕方なかった。家族ではげまし合いながら待った。いつもの6時間より、とてつもなく長く感じた。手術が終わり祖父が運ばれてきた。無事に手術が終わったことを告げられると家族みんなほっと一安心した。しかし、ベッドに寝ている祖父は、手術前とは違い、弱々しく声も思うように出ない状態だった。その祖父の姿を見て母は泣いていた。手術が成功した安堵感と手術後の祖父の傷ましい様子を見て複雑な感情だったのだろう。それから祖父は徐々に回復の方向に向かい退院することができた。退院しても呼吸のリハビリなどやる事がいっぱいだ。祖父は一人暮らしなので退院後、少しでも力になりたいと思い、夜ごはんを作って持っていくようにした。祖父はとても喜んでくれた。この事がきっかけで祖父との会話も増えた。進路の話、将来の仕事の話、いろんな話をした。祖父と話すことで学ぶ事がいっぱいあった。これからも、もっと祖父のため家族のために何かしてあげたいと思った。

家族の誰かが辛い時、一緒に分かち合う、支え合うことで心に余裕が生まれて乗り越えることができる。私が今この世に存在しているのは先祖のおかげです。祖父、祖母、父、母がいるからです。自分が支えられているばかりでなくもっと家族の支えになりたいと思うようになった。家族の時間は一生ではない。家族のかけがえのない時間をこれまで以上に大切にしていきたいと思った。

海田町立海田中学校

2年 横平 拓海

「またね」

この言葉を交わすたびに僕は悲しくなります。お父さんが単身赴任先へと行ってしまからです。僕が小学5年生になるときに、お父さんは仕事の都合で単身赴任になりました。それまでは、毎日夜になるとお父さんが「ただいま」と言って家に帰ってくるのが当たり前だと思っていました。今では、お父さんに会えるのは月に1回、多くて2回くらいで、お父さんが毎日家に帰ってくるのが当たり前ではなくなっていました。

僕は月に1回、お父さんが家に帰ってきてくれる日をとても楽しみにしています。僕とお父さんの共通の趣味がゲームとスポーツ観戦なので、お父さんが帰ってくると、一緒にそれらをして楽しんでいます。お父さんはとくにサッカーが好きなので、一緒にサッカーゲームやサッカー観戦をすることが多いです。サッカーゲームでは、お父さんが操っている選手の珍プレーに大爆笑したり、サッカー観戦では、応援しているチームの試合に二人で熱く盛り上がっています。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいます。お父さんが帰ってきてくれるまでの1か月間は想像よりも長く、帰ってきている数日間は想像より短く終わってしまいます。まだ一緒にやりたいことがいっぱいあるのに…と思いながらいつも見送りしています。お盆やお正月など、帰ってきている期間が長いときには、朝起きるとお父さんがいる回数が多くて幸せな気持ちになります。でも、お父さんの見送りをした後、ソファーにコントローラーが2個置いてあるのを見ると、さっきまで一緒にゲームしてたのにな…と、とても寂しい気持ちになります。

それでも、辛いのは僕よりお父さんのほうです。家族と会えずに単身赴任で仕事を頑張ってくれています。なので、そんなお父さんを笑顔にするために、僕はお父さんと過ごす時間を全力で楽しんでいます。

「またね」

1か月後、お父さんがまた帰ってきてくれるその日まで、僕も毎日を頑張ります。

呉市立阿賀中学校

3年 高 崎 夕 未

私は小学3年生の秋ごろ、心臓に持病を患いました。

母も父も、とても驚いていたし、何より私自身、これからどうなるんだろう。今まで通り生活できるかな。ととても不安になりました。

そんな不安でいっぱい私たちに、さらに大きな悲しみが襲ってきました。

それは、同じ年の冬の父の他界です。この当時、妹はまだ幼く、私もなかなか心が整理できず、ただ、悲しく大きな喪失感を覚えました。しかし、一番辛かったのは母でした。父が亡くなって、すぐ、母は今まで見たことがないほどのショックを受けていました。親戚や友人に連絡する度に目に涙をうかべていたのは今でも覚えています。そして、そんな母を見て、これからは不安でした。

そんな悲しみや喪失感でいっぱいだった日から、約6年経とうとしています。

最初に話した私の心臓の持病もこの“6年”という長い月日を経て治りました。

そして、父が亡くなって6年経っても、父の友人や親戚と会えば、必ず父の話が出るくらい父はとても優しく、いい人だったんだなぁと思うし、父を知っている人から、「夕未は父さんに全部似とるね。」と言ってもらいますが、その度に、父のような人になりたい、と思うほど心から尊敬できる父でした。

今の生活はとても幸せです。でも、やっぱり、父がいないことがマイナスになってしまいます。母に反抗的になったり、周りと自分を比べてしまい、「なんで私の家はこうなんだろう。」「父さんがいたらこんなことにならなかったのに。」「父さんがいれば、あれも、これもできたのに。」と内心どこかで思ってしまうこともあります。

勉強面でも、精神面でも、私の身体のことでも、母には迷惑しかかけてないんじゃないかというくらい多くの迷惑をかけてしまっていました。だけど、多くの愛情を母から注いでもらってきました。

そして、私は今年、高校受験という大きな一つのターニングポイントに立ちました。

そんな今、家族に協力してもらってばかりではありますが、亡くなった父のことをしっかり胸に感じながら、父の代わりになることができないとしても、私なりに頑張っ、母に恩返しがいつかできるように。

三原市立大和中学校

3年 東 朝 日

僕は陸上部に所属し、長距離走をしています。1・2年から入賞を重ね、県内でも上位の方に位置していると思っていました。しかし、中学生最後の県大会では、満足のいく走りができず、入賞すらすることができませんでした。しかし、この大会で学んだことがあります。それは、家族の応援、支えが何よりも力になるということです。実は僕は県大会の前に怪我をしていたのですが、その時に家族が、「焦るな」や「大丈夫」などとたくさん声をかけてくれました。また、スタート前や競技中にも、僕のためにたくさん応援してくれました。僕は家族の応援があったからこそ今日まで陸上を続けることができたのだと思います。家族にはとても感謝しています。

しかし、この学びを得たからこそ、後悔していることがあります。それは、僕が小学校低学年のときのことです。僕には姉がいます。当時姉は中学生で、僕と同じ陸上部の長距離選手でした。姉は県内の大会で3位には入る実力を持っていて、今の僕よりレベルが高い選手でした。姉は僕と同じ中学生最後の県大会で3位に入り、中国大会に出場することを目標にしていたそうです。しかし、そんなことを知らなかった僕は、ただ親に連れられて見に行っただけで、暑いなど思いながら心から応援はできていませんでした。姉は4位で目標には届きませんでしたが、「楽しかった」と言っていました。目標は達成されていないのに、なぜ「楽しかった」と言えるのか僕にはわかりませんでした。悔しくはないのかとも思いました。

しかし、今では姉の「楽しかった」という言葉の意味が分かります。「楽しかった」という言葉の中には、家族の応援や支えがあったから、全力を出し切れたという感謝の思いや、目標を達成できなかった悔しさをこれからに生かしていくという意味が込められていると思います。そんな姉の言葉に反し、あのときの僕は、姉の家族として支えてあげることができていませんでした。まともに応援することすらもできませんでした。あのときの姉と同じ立場になったからこそ今、とても後悔しています。

しかし、後悔して終わってはいもったいないと思います。今の僕がどんなに後悔しても、あの日の姉への声援を変えることはできません。しかし、そこから学び、生かすことはできます。過去に学び、そこから今の自分がどうするのが一番大切なことだと思います。

中学校生活もあと半年です。もうすぐ高校生になり、家族との関わりも少なくなっていくでしょう。そんな僕にできることはなんだろうと考えたとき、家族との時間をこれまでよりも大切にすることが結局のところ一番良いのではないかと思うのです。そんな些細なことで良いのかと思う人もいるかもしれませんが、しかし、そんな些細なことこそがこれまでの家族との日常を保ち、これまで以上の支え合いへとつながると信じています。そして、今日まで応援してくれた家族のような存在に僕もなりたいと思います。

三原市立久井中学校

3年 宗岡美来

私は、小学校6年生の頃から塾に通わせてもらっています。自分の家から車で約30分、約30キロメートル離れたところまで毎週送り迎えをしてもらっています。その塾へ行くことになったきっかけはおばあちゃんからの勧めでした。

「体験だけでも行ってごらん。」

おばあちゃんとお母さんは私の背中を押してくれて、体験に行くことになりました。私は塾に行くのは初めてだったため、緊張していました。体験から3か月経った頃に入塾することが決まりました。平日の塾の送り迎えはすべておばあちゃんがしてくれました。特に、火曜日は習い事のバレエと塾が重なっていたので、塾が終わったら、車の中で着替えと夜ご飯を済ませてバレエへ行きました。バレエを引退するまで毎週火曜日は、塾が終わり車に乗ると大好きな昆布おむすびなどが置いてありました。台の上にきれいに置いてあるおむすびなどを見ると、おばあちゃんから「頑張れ」というメッセージが聞こえてくるようで、ますます頑張ろうという気持ちになりました。

塾に慣れてくるようになると、行くときの緊張が和らぎおばあちゃんとの会話もはずみました。そのときに、何でこの塾を勧めてくれたのとおばあちゃんに尋ねました。

「娘たちを通わせてあげられなかったからね。もし、塾に行くことになったら通わせてあげたかったの。」

とってくれました。私は、そのときもっと頑張って笑顔になってもらいたいと思うと同時に、私を思ってくれていることを大事にしていきたいと思いました。また、勉強の進み具合や景色、昔のことやこれからのことの話が楽しくてこの時間が大好きになりました。中学校に入ってから、授業の時間が長くなったため、行きはおばあちゃんに送ってもらい帰りは母が迎えに来てくれることになりました。まだ慣れない環境だったせいか、私は送ってもらうときに、眠ってしまい会話をすることが少なくなりました。

中学校2年生の頃、おばあちゃんは、足の手術でしばらく入院、そしてリハビリをすることが決まりました。家族で話し合ったときに、今じゃなくてもいいのではないかという意見もありましたが、

「みくの受験もあるんだから、今、治して、送り迎えとか受験に集中しないと。」

とおばあちゃんは言うことができました。今は、リハビリも終わりまた塾の送りをしてもらっています。

おにぎりを買ってくれたことや送り迎えをしてくれたことも嬉しかったですが、私を思っただけの言葉に、おばあちゃんの優しさを感じたことがなにより嬉しかったです。そして、これからも頑張ろうという気持ち、原動力にもなりました。おばあちゃんには、感謝してもしきれません。言葉で伝えきれないかもしれません。だから、これからの行動で一生懸命表現していきたいと思っています。

東広島市立磯松中学校

3年 山井 菜央

今年の4月、兄が広島を出て、大阪で一人暮らしを始めた。父、母、姉、兄、私が5人で暮らしていた家も、4人暮らしとなった。引っ越しの日、兄との数々の思い出が蘇ってきた。

小さい頃から兄は、私にちょっかいをかけてばかりだった。私がトイレに行こうとしたらわざとトイレに入ったり、朝急いでいるのに道をふさいできたりなど。だから私は兄のことをあまり好いていなかった。でも本当は小さい頃から兄のことが大好きだったのかもしれない。そう実感したのは、兄が引っ越してからだった。反抗期だった姉に怒られて泣いているときになぐさめてくれたのは兄だった。小学生のとき大きなトラブルに巻きこまれて困っていたとき一緒に解決策を考えてくれたのも兄。中学生になって部活や勉強で伸び悩んだとき話を聞き、焦らなくていいと励ましてくれたのも兄。たくさんの場面で私のことを支えてくれていたのである。また、楽しい思い出もたくさんある。一緒にオセロやカードゲームをしてくれたり、家の中を一緒に冒険したり、兄が弾くギターに合わせて私が歌ったり。父や母、姉の前では気を遣ってしまう私も、兄の前ではありのままの自分でいられるような気がする。

そんな兄が県外の大学を目指すとき聞いたときには、少しびっくりしたけれど全力で応援した。合格したときには兄とハイタッチを交わした。同時に少し寂しかった。もうこの家から出ていってしまうのか、と。兄が広島を出るまでの数週間のうちに5回も家族で外食に行った。昔撮った写真と全く同じポーズで写真を撮ったり、今までの思い出について家族で語り合ったりして、いい家族だなと改めて思った。

そして引っ越しの日、姉は用事があって来れなかったので4人で大阪に行った。兄の新居に置く家具を購入して新居を見に行った。その日の夜はみんなで串あげを食べたあと、太陽の塔を訪れた。こうやって家族で観光をする機会が減ると思うとやっぱり寂しかった。お別れの日、頑張って涙をこらえて、兄を見送った。

5月に兄が帰省してきた。何一つ変わっていない兄を見て私はなぜかほっとした。一人暮らしの様子を聞くとゴキブリ対策のスプレーを1週間に3回撒いているらしく、虫嫌いでビビリなところも変わっていないなと思った。最終日には家族でサッカー観戦に行った。そのまま新幹線で大阪に帰る兄の背中を見送る時はやっぱり寂しかった。

この夏休み、今度は私たちが兄に会いに大阪へ行く。また兄とご飯を食べたりできるのが楽しみだ。

私の自慢の兄へ。遠く離れていても応援しています。大学生活、全力で楽しんで頑張ってね。

廿日市市立四季が丘中学校

3年 脇谷 晏治

私は5人家族の長男で姉が1人弟が1人、祖母祖父は2人ずつ、ペットは犬2匹と一般的な家族だと思います。しかし、私の母は約2年前乳がんステージ2と診断されました。当時の私は思春期で母や父など大切な家族に意味もなく強く当たってしまっていました。そんな中で母が乳がんで私は心配と反抗の気持ちでこれまでもなく感情が不安定でした。そのため、本当は心配で不安でたまらない母と距離を置いてしまいました。がんが発見されて約1か月後、母は治療に専念するため仕事を休職し、本格的な抗がん剤による治療が始まりました。薬の副作用で髪の毛が抜けたり、顔色が青白くなった母はまるで別人になったかのように弱々しくとてもしんどそうにしていました。どちらの祖父祖母も毎日お見舞いへ行ったり母の代わりに家事や私達の世話をしてくれました。また、母の知り合いからの手紙などたくさんの人の思いを感じることがありました。私もそんな周りからの思いにつられ少しずつ反抗の気持ちから心配や気を遣うといった気持ちの変化が現れてきました。お医者さんや家族、周りの人たちの助けもあり発見から約1年3か月がんの摘出手術が可能となり、無事成功し、私は手術を終えた母の元へ行き母の手を強くにぎると自然と涙がこぼれてきました。自分でもよく分かりませんが、おそらくあの時の思いは反抗していたことを悔やむ気持ちや無事に成功しとてもうれしかった思いなどたくさんの気持ちがあったと思います。今も母はがんが再発しないよう、副作用の強い薬を服用していますが、仕事にも復帰し、祖父祖母の助けをかりながらも何事もなく以前と変わらない生活にもどってきました。しかし一番大きく変わったことがあります。それは私の思いです。以前は反抗して家のためにあまりできていませんでしたが、今は積極的に手伝いを家族として行い、できるだけ母や祖父祖母に無理をさせないよう努力しています。がんをきっかけは少し恥ずかしいですが、今、この多感な時期にこういったことを経験できたことや人のためになんとかしようという思いを得られたことは最大の財産だと感じています。これからも家族にはたくさんの迷惑をかけるとは思いますが、その分、「家族のため」になることを少しずつしていき家族として幸せな時間を1秒でも長く感じられるようにしていきたいです。最後に私が伝えたいことは私達は一人では生きていくことは大変むずかしいと思います。そんな中、いちばん力になってくれ一番信頼できる「家族」という存在を大切にしてほしいと思います。一番身近で忘れてしまいがちだけど家族を大切に、一緒に楽しくくらすことを当たり前にしてほしいです。

尾道市立久保小学校

2年 宮本 泰志



かぞくみんなでごはんを食べているところ。

入選

大崎上島町立東野小学校 1年 望月章宏



ママとこいをみにいったのしかったよ

広島市立長束小学校 2年 伊藤 慎



妹のたんじょうびです。弟とよくけんかします。

東広島市立寺西小学校 3年 上野暉典



家族みんなでそうめんがしをしました。

東広島市立寺西小学校 3年 朽木莉希



家族でキャンプに行ったのが楽しかった。

福山市立津之郷小学校 5年 栗田永遠



お父さんと初めての山陰でイカの夜釣り

令和6年度「家庭の日」作文・図画募集要綱

- 1 趣 旨 健全で明るい家庭は、家族みんなで話し合い、家族みんなで楽しみ合い、家族みんなで力を出し合うことによって築かれます。
青少年育成広島県民会議では、毎月第3日曜日を「家庭の日」として定め、明るい家庭づくりの運動を展開しています。
この運動が広く地域に浸透し、多くの家庭で実践されることを願って、小・中学生が、家族や家庭について日頃思っていることや感じていること、家族と一緒に体験したことなどを作文や図画に表現した作品を募集します。
- 2 対 象 者 県内に在住の小・中学生
- 3 主 催 公益社団法人青少年育成広島県民会議
- 4 後 援 広島県・広島県教育委員会
- 5 協 賛 広島ロータリークラブ、広島南ロータリークラブ、広島東ロータリークラブ、広島東南ロータリークラブ、広島北ロータリークラブ、広島西ロータリークラブ、広島中央ロータリークラブ、広島西南ロータリークラブ、広島陵北ロータリークラブ、広島安芸ロータリークラブ、広島城南ロータリークラブ、広島廿日市ロータリークラブ、広島安佐ロータリークラブ、(敬称略、順不同)
- 6 応募方法
作文
・400字詰め原稿用紙3枚程度とします。
・縦書きとし、はっきりと書いてください。
・題の次に、学校名・学年・名前(ふりがな)を記入してください。
図 画
・作品は4つ切りの画用紙とします。
・描く材料は自由です。(クレヨン、水彩絵の具等)
・ポスターではないため、標語・タイトルやキャッチフレーズは書かないでください。
※画用紙に折り紙等を貼り付けないでください。
・裏面の「図画応募用紙」に記載し、作品の裏に貼付してください。
作品のコメントも忘れずに記載してください。
注意事項
・一人1点に限ります。
・本人の作品で未発表のものに限ります。
・提出された作品は、返却しません。
・企業名や商号の入った作品は対象外となります。
・作成指導に当たっては、作品に直接手を加えないようにお願いします。
・図画は送付時に丸めないでください。
- 7 応募数 作品は応募校で事前審査し、作文・図画それぞれ各学年5名以内で応募してください。なお、作品を書いた児童・生徒全員に参加賞を贈りますので、作品の応募総数を明記してください。
- 8 応募締切 令和6年9月4日(水)必着
- 9 送付先 〒730-8511広島市中区基町10番52号 広島県環境県民局県民活動課内
(公社)青少年育成広島県民会議 電話 082-513-2742/FAX 082-511-2173
- 10 審査方法
(1) 予備審査は作文のみとし、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成県民会議職員が行います。
(2) 事前審査は作文のみとし、学識経験者、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成県民会議職員によって構成する審査員が行います。
(3) 作文・図画の審査会は、学識経験者、関係行政機関の職員、(公社)青少年育成県民会議職員によって構成する審査員が行います。
- 11 表 彰 特選者は、青少年育成県民運動推進大会において、広島県知事賞の賞状及び賞品を授与します。入選者は、当県民会議会長賞の賞状及び記念品を後日送付します。
- 12 副 賞 特選者は、3,000円の図書カードを贈ります。また、応募者全員に参加賞を送付しますので、必ず応募者の控えをお持ちください。
- 13 そ の 他 入賞作品は、当県民会議発行の入賞作品集や、機関紙「せとのあさ」に掲載するなど広く活用させていただきます。

審査員及び審査要領

●作文の部審査員

宇佐川秀輝	(公社)青少年育成広島県民会議常務理事
石田 睦子	三次市教育委員会社会教育委員
小原 正啓	尾道市立瀬戸田中学校長
中村 好宏	広島県環境県民局県民活動課長
福田菜津美	広島県教育委員会学びの变革推進部義務教育指導課指導主事

●作文の部審査要領

1 選定方法

- (1) 特選（県知事賞）…… 3 作品
- (2) 入選（会長賞）……… 上位20作品程度を選定する。

2 審査の方法

(1) 事前審査

- ・小学校低・高学年、中学生の部をとおして、「家庭の日」の理解度、感銘度、論題にそった論旨、論点の整理、表現力、文の構成等を審査する。
- ・評点は10段階評価とする。
- ・特選を10点満点とし、小・中学生をとおして、特選3作品を選定する。
- ・入選は上位20作品程度を選定する。
- ・学年ごとに平均して選定しなくても良い。

(2) 審査会

事前審査の結果をもとに協議し、相互調整して特選、入選を選定する。

●図画の部審査員

濱田 昭法	元広島県教育研究会美術部会会長・元広島市教育研究会美術部会会長
宇佐川秀輝	(公社)青少年育成広島県民会議常務理事
住田 佳子	広島県教育委員会学びの变革推進部義務教育指導課指導主事
中村 好宏	広島県環境県民局県民活動課長
藤崎 綾	広島県立美術館主任学芸員

●図画の部審査要領

1 選定方法

- (1) 特選（県知事賞）…… 1 作品
- (2) 入選（会長賞）……… 5 作品

2 審査の方法

- (1) 作品ごとに、表現力、構成力、家庭の日の理解度等を審査する。
- (2) 候補作品を学年ごとに並べ、審査員は1学年ごとに、5点ぐらい選定する。なお、各審査員同士が同一作品を選定しても良い。
- (3) 候補作品は必ずしも各学年から均等に選ばなくてもよいが、できれば小学校（低・中・高学年）、中学校のバランスを考慮する。
- (4) 審査員が全学年の作品を見た後、(2)で選んだ作品を全部並べ、その中から特選1点、入選5点を協議により選定する。

令和6年度「家庭の日」に関する作文・図画応募校一覧表

小学校の部		作 文							図 画							応募 総数	参加 人数		
番号	学 校 名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	作・ 参加 人数	1年	2年	3年	4年	5年	6年			計	図・ 参加 人数
1	広島市立緑井小学校			3	1		2	6	6									6	6
2	呉市立川尻小学校			2	1		1	4	4									4	4
3	三原市立糸崎小学校	5	5	5				15	79									15	79
4	竹原市立大乘小学校		2				2	4	4									4	4
5	廿日市市立金剛寺小学校		1					1	1									1	1
6	東広島市立小谷小学校	1	1	3	1	2		8	9									8	9
7	広島市立長束小学校									5	5	2	2	1		15	25	15	25
8	福山市立津之郷小学校									2		1	2	2		7	7	7	7
9	福山市立御幸小学校	1						1	1	2			1		1	4	4	5	5
10	東広島市立寺西小学校			1	1			2	2	3	5	2	1			11	16	13	18
11	大崎上島町立東野小学校									2						2	7	2	7
12	広島市立五月が丘小学校			2				2	2	1	1			1		3	3	5	5
13	広島市立大河小学校									1		1				2	2	2	2
14	広島市立狩小川小学校			1			1	2	2		1		1			2	2	4	4
15	東広島市立御園宇小学校									4		2	1			7	10	7	10
16	呉市立安登小学校									1						1	1	1	1
17	広島市立井口小学校		2	1	1		1	5	5	4	4	3		4	1	16	30	21	35
18	広島市立楠那小学校		1		2			3	3	1					1	2	2	5	5
19	三次市立みらさか小学校									1	1		1	1		4	4	4	4
20	三原市立小泉小学校														2	2	2	2	2
21	竹原市立竹原西小学校		1	2	5	4	1	13	39	4		1	1			6	7	19	46
22	広島県立尾道特別支援学校												2			2	2	2	2
23	広島市立亀崎小学校			1				1	1	1						1	1	2	2
24	広島市立東浄小学校		1					1	1		1	1	1			3	3	4	4
25	広島市立阿戸小学校				1			1	1				1			1	1	2	2
26	東広島市立西条小学校	2			2		1	5	8	1						1	2	6	10
27	東広島市立板城西小学校									1	1	2				4	4	4	4
28	広島市立口田東小学校					1		1	1	2	3		1			6	6	7	7
29	福山市立春日小学校		2	1	1	1	1	6	6	2	1			2		5	5	11	11
30	呉市立宮原小学校									1		2	1			4	4	4	4
31	尾道市立久保小学校									1	2			2		5	16	5	16
32	廿日市市立平良小学校									1	1				1	3	3	3	3
33	呉市立坪内小学校					1		1	1	1	1	1				3	3	4	4
	合 計	9	16	22	16	9	10	82	176	42	27	18	16	13	6	122	172	204	348

令和6年度「家庭の日」に関する作文・図画応募校一覧表

中学校の部		作 文					図 画					応募 総数	参加 人数
番号	学 校 名	1年	2年	3年	計	作・ 参加 人数	1年	2年	3年	計	図・ 参加 人数		
1	広島市立観音中学校	5	5	1	11	25						11	25
2	広島市立城山北中学校	1	4		5	14						5	14
3	広島市立長束中学校	5	5	5	15	58						15	58
4	広島市立戸山中学校	4	3	5	12	14						12	14
5	広島市立五日市中学校	4	3	5	12	75						12	75
6	広島市立五月が丘中学校	1	2	4	7	7						7	7
7	呉市立天応学園	2		2	4	7						4	7
8	呉市立阿賀中学校	3	2	5	10	13						10	13
9	呉市立呉中央中学校	2	3		5	30						5	30
10	呉市立白岳中学校	4			4	101						4	101
11	呉市立昭和中学校	5	5	3	13	21						13	21
12	呉市立倉橋中学校		1	1	2	2						2	2
13	呉市立明德中学校			1	1	1						1	1
14	広島市立可部中学校	5			5	57						5	57
15	呉市立和庄中学校	3			3	3						3	3
16	三原市立第五中学校	5	5	5	15	22						15	22
17	竹原市立竹原中学校	5	5	5	15	38						15	38
18	三原市立大和中学校			2	2	20						2	20
19	三原市立久井中学校	1	2	3	6	40						6	40
20	尾道市立久保中学校	5			5	48						5	48
21	尾道市立美木中学校	2	2	1	5	34						5	34
22	三次市立吉舎中学校	1	3		4	9						4	9
23	三次市立塩町中学校	2	2		4	8						4	8
24	広島県立三次中学校	5			5	40						5	40
25	東広島市立磯松中学校	5	5	3	13	31						13	31
26	廿日市市立七尾中学校	5	5		10	18						10	18
27	廿日市市立四季が丘中学校			5	5	12						5	12
28	廿日市市立野坂中学校		2		2	2						2	2
29	海田町立海田中学校	5	5	5	15	72						15	72
30	北広島町豊平学園	1	4		5	5						5	5
31	福山市立鳳中学校						1	1	1	3	3	3	3
32	広島大学附属三原中学校						1	1		2	2	2	2
	合 計	86	73	61	220	827	2	2	1	5	5	225	832

令和6年度入賞作品集
「少年の主張」・中学生話し方大会
「家庭の日」に関する作文・図画

発 行

公益社団法人 青少年育成広島県民会議

〒730-8511 広島市中区基町10番52号
広島県環境県民局県民活動課内

TEL 082-513-2742 FAX 082-511-2173

URL : <https://www.hiro-payd.or.jp/>



笑顔生まれる、 元気なあいさつ

おはよう!

広島県の
青少年のマスコット
ゆっぴー

さようなら!

こんにちは!

ありがとう!

おやすみ!

